華のように楓のように

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
華のように楓のように

【Ｎコード】
Ｎ６７８９Ｋ

【作者名】
みかん

【あらすじ】
またしてもいつの間にか５０００アクセスを突破していました！！ありがとうございます♪

時は天下泰平江戸時代ーーー

平和ボケしているように見える世の中に、幕府直轄の超極秘秘密諜

報部隊が存在した。

全員十五・六歳の男女三人で構成されており、

その名は《華蝶楓月》

世に潜む諸悪の根を暴き出す彼らの名を知らない者は江戸の町には居なかった。

だが彼らの素性は誰も知らなかった。

そんな風には見えない四人の少年少女達だから。

“若い世代でも読みやすい時代劇”を目指して書いてみます。

よろしくお願い致します。

壱ノ伝　竜之介

思えばいつも側にキミがいた。
ヒマワリの様に明るくて眩しくて、
キキョウの様に優しくて温かく。
ランの様に気高く凛としている。
暗く冷たいどこまでも続く暗闇の中、いつもキミが側にいてくれた。

今でもキミとの想い出は胸にしまってあるよ。
今は離れ離れになってしまったけれど。。。
今でもきっとキミはオレだけじゃなく、
周囲の人全てを幸せにしていることだろう…。
広く青く大きくてどこまでも続くこの空の下で。
誰よりも傷付きやすく人の痛みを知るキミだからきっと…

キミとの出逢いはきっと必然だったんだね。

前夜から続く冷たい雨――

それだけでも心は憂鬱だというのに、

オレはどしゃ降りの雨の中、どうして良いかワケが分からず町を彷徨い歩いていた。

強く冷たい雨の中、傘も差さずに。。。

【お前は、実は徳川将軍家の人間なんだ。】

父上から突然告げられたあまりにも突拍子過ぎるコトバにオレは、

アタマを鈍器で殴られたかの様な衝撃で、

自暴自棄になって家を飛びだし、町中を狼狽えながら歩き続けた。

頬には自然と涙が流れていた。

雨なのか涙なのか分からない程泣いていた。

おかしいとは思っていたんだ。

ごくごく普通の城下町に住む、剣術道場のしかも三男が2人の兄を

差し置いて、度々父上と登城していたんだから。
しかも剣術の稽古も上様や若君様達に交ざってやっていたんだから。
どう考えたっておかしすぎるよな。
だからって何もよりによって徳川家の人間じゃなくても・・・。
うつ向いたままで渇れる程泣いた。
いつの間にか泣き止みふと立ち止まり、オレは道端に座りこんでいた。

そんな時だった、キミと出逢ったのは…。
うつ向いていたオレが、目の前に立つキミに気付いて顔を上げると天使の様な優しく温かい笑顔でオレを見つめていた。
オレは驚いた顔でキミを見てしまっていたね。
キミは戸惑うコト無く、
『コレをどうぞ。ワタシはすぐですから。』
とオレに傘を差し出しそのまま走り去って行った。
突然の出来事にオレは唖然とするだけで何も出来ず、走り去って行くキミをただ見つめているしか出来なかった。
キミに声を掛けられたコトで我に返ったオレは、キミがくれた傘を

差して家に戻った。

「もう少しでお前も十五になる。だから話した。」

父上にそう言われたが、オレにとっては何歳で言われようが同じだった。

オレが父上に連れられ再び登城したのは次の日の早朝だった。

弐ノ伝　るう

キミはいつも寂しげな瞳をしていたね。

誰にも心の中を覗かれまいとする冷たさすら感じられるその瞳。

だけど瞳の奥はとっても澄んでいて、

キミのココロと同じだったね。

いつでもキミは優しくて、

温かくて。

そして誰よりも傷付き易かった。

そんなキミだから、他人の心の痛みにも人一倍敏感だった。

離れ離れになる時も、誰よりも寂しげだったのは今でも忘れないよ。

キミが好きだった花も一緒にね・・・。

アタシの名前は、るう。

近くのお寺で子供達の面倒を見ながら読み書きや剣術なんかを教える十五歳。

アタシもお寺の子供達と同じで親がいないで育ったんだ。

つい最近1人で暮らし始めたけどね。

と言ってもアタシには実は親はいるんだ。

兄上や姉上や妹弟もいる。

ワケあって一緒にいないダケ。

アタシは小さい頃から俗に言う“お姫様遊び”が大っ嫌いで、兄上達に交ざって剣の稽古をするのが大好きだったの。

みるみるうちに上達しちゃって周囲の大人達が呆れる中、父上だけが大層感心して下さって、

「このまま姫としてどこかに嫁がせるのは勿体無い」と、アタシをあえて養女に出すコトになったんだけど・・・

「あまり表沙汰になるようなトコロでは目立ってしまい危険です。」

と言う父上が絶対の信頼を置いておられる篠矢様のご意見で、篠矢様のご紹介で町外れの小さなお寺に預けられるコトになったの。

“嫁がせるのは勿体無い”

ただそれだけで家族と引き離されるのも酷い話だよね…。

でも心置きなく剣の稽古が出来るコトが何よりも嬉しかったアタシは、それだけで引き受けた。

そんな姫です。

後から思えば、確かにあのままいればどのみち何年か後にはどこかに嫁ぐコトになっていたんだからって、住職には言われたの。

あたしがお城にいた時から姉上がお嫁に行くのを何度か見ていたから頷けた。

“姫”とか“お城”とか“側近”とか。

アタシの正体、実は徳川家の姫様。

って言っても“元”姫様だけどね。

「近い将来、徳川家を護ってくれるだろう。」

そんな望みを託されて、アタシは自分の人生を政の道具にされてしまう家を離れた。

それから約十年———

六歳の時に城を出た幼かったアタシは、今や立派な町娘。

正室の子供だけじゃなく側室の子供も入れたら数十人いる城内で、1人くらい居なくなったトコロで何とでもなるらしく、アタシが居なくなったコトなんて、何の問題も無かったらしい・・・。

参ノ伝　颯太

いつもキミは笑っていた。

太陽の様なキミは周囲を全て明るく優しく包んでくれた。

哀しいときも辛い時もキミが側にいるだけで満足だった。

でももう大丈夫だよ、キミがいなくても。

キミと離れ離れになった直後は心にポッカリ穴が開いたようだったけど。

ボクらはきっと、この広い空の下1つだから・・・。

ある晴れた日の午後ーーー

いつもの様に修練に励んでいたオレに、長老が話し掛けてきた。

「颯太…。」

オレは手を止めて歩き出し長老の後を付いていった。

「お前に徳川将軍家からお呼びが掛かった。明日使いが来るそうだ。明日そのまま発て。」

突然だった。

いつかは多くの兄者達の様に、オレもどこかのお殿様から呼ばれお仕えする日が来るだろうと今まで修練に修練を重ねて来てはいたが…。

しかも明日発てとは何ともぶしつけな。

オレは何も言えなかった。

ここでは長老の言うコトは絶対だ。

ここにいるオレ達は全員長老に育てられてきた。

言わば親同然だ。

オレはまだ赤子の頃にこの伊賀の郷に連れて来られたらしい。

赤子の頃だ、記憶は無い。

川の流れを呆然と見ていると、オレの目の前に長老が紐がついた木札を差し出した。

家紋らしきモノが焼印されていた。

何処かで見たコトがあるような気がした。

顔を上げて長老を見た。

「オマエがココに連れて来られた時に身に付けていたオマエの護り札だ。」

護り札？

ならば何故長老が？？

疑問を感じながらも木札を手にした。

「それを付けたままではいずれ周囲にお前の素性が知れてしまうと思い、あえて儂が預かっておいた。」

「オレの素性？」

たまらずにオレは聞き返した。

良からぬ胸騒ぎは、した。

この焼印が家紋に見えるからだ。

案の定、その胸騒ぎは見事に当たってしまう。

「この家紋は徳川家の家紋だ。すなわちお前は徳川家の人間だ。」

何か大きな岩か何かが落とされたかと言うくらい、オレは強く激しい衝撃を受けた。

「公方様のお考えで、ご子息様の中から何人かを養子や里子に出し、行く行くは徳川家を護れる人間になるようにとお前がここに来たのだ。」

長老のコトバは耳には入ってきたがアタマには入って来ていなかった。

ただひたすら木札に見入っていた。

その後翌朝使いが来るまでの記憶が一切無かった。

余程驚愕だったんだろう。

オレは使いに連れられて郷を旅立った。

コトの事態に把握出来きれず別れの哀しみも寂しさ感じられないまま郷を出た。

ただ、オレの姿が見えなくなるまでずっと仁王立ちでどっしり構え、オレをじっといつまでも見ていた長老の姿に込み上げてくる熱い何かは感じたのだった。

木札を手の中で強く握りながらオレはその姿を見ていた。

郷も長老も見えなくなった後、オレは傘で隠してひとしきり泣いていた。

何故か自然と流れてくるのだった。

脳裏にはもちろん今までの辛かった修練の記憶や郷のみんなと過ご

した日々の想い出が浮かんでいた。。。

これから何が待ち受けているか、今は考えたく無かった。

青天の霹靂

時は天下泰平と謳われた江戸時代ーーー

長い長い戦国時代が遠い過去のように争いの無い平和な世の中。

だがその裏では、厳しい身分制度を悪用し、権力にモノを言わせ私利私欲の為に動く権力者が少なくなかった。

カネと権力のないモノが苦労し、あるモノがイイ目を見ると言うはいつの時代も同じだった。

時の将軍は、いつか来るべき日の為に十数年前にある計画の為に自分の嫡子と徳川分家から何人かを養子に迎え、その上であえて多方面に養子や里子に出していた。

その真の目的は将軍本人と、時の老中、、、では無く将軍が絶対の信頼を寄せる家臣の篠矢のみが知る超極秘内部機密だった。

引き受けた先の各々の主は真の目的は知らない。

その真の目的ーーーそれは、

“絶対的に信頼できる特殊隠密組織を結成するコト”

だった。。。

将軍周辺には多くの側近がいて、どの側近も口では忠義を誓ってはいるが“念には念を”と言う考えで計画された。

将軍直属の隠密はいるが、またそれとは別に置くと言う誰が言うワケでも無い暗黙の習わしだった。

それから十数年の月日が経ち、各々に立派に成長した3人の子女達は自分の素性を知った上で、各々に江戸に集まっていた。

忍の颯太・剣術道場三男坊の竜之介・寺で幼子の面倒を見る町娘のおるうの3人は、今まさにおるうが通う寺の片隅に呼び出されていた。

この寺は孤児の面倒を見ている寺で、おるうも此処に預けられ剣術や読み書きに励んできた。

寺の人間は住職だけがおるうの素性を知る人物だ。

寺の片隅にある茶室にはおるうが既に待機していた。

寺の端にある、竹やぶに覆われた最近出来たばかりの真新しい茶室だ。

まずやって来たのは篠矢だった。

篠矢はおるうや颯太の様子を伺いに度々寺や伊賀の郷に訪れていた。

颯太はまさか自分のコトを訪ねて来ているとは思ってもいないでいた。

『これは篠矢様。』

“「隅の茶室で茶の支度をして来てくれないか。４人分程。」”

ただ住職にそう言われ、言われるがまま茶室にやって来たおるうは、これから何が起きるのかを全く分かっていない。

『これから住職と何かお話でも？』

自分がこれから起こるコトに関わるとは全く思ってもいないおるう。

何の気なしに尋ねる。

篠矢は何も言わずただやんわりと微笑む。

不可解さは感じたモノの、支度を終えたおるうは立ち上がろうとした。

『では私はこれで。』

篠矢がすかさず止める。

「おるう様にも居て頂きたい。」

おるうは驚いた。

篠矢の含み笑いに戸惑いながらも座り直し、茶を点てるおるう。

「素晴らしい茶ですね。」

篠矢のごく自然な優しい微笑みにおるうはわずかに動揺を感じたの

だった。

間も無く声がした。

「矢島竜之介成之に御座います。」

「お入り下さい。」

おるうは益々不可解さを感じている。

入室した竜之介とおるうは顔を見合せて声を上げた。

『あっ！！』

「あっ！！」

2人とも同じ様に目を丸くさせた。

「お知り合いでしたか？」

篠矢の問い掛けにまたしても2人で同じ様にためらい気味に答えた。

『ええ。』

「はぁ…。」

「左様でしたか。」

また穏やかに微笑んだ。

「先日、どしゃ降りの雨の日に通りすがりに傘をお貸し下さいまし

た。その節は助かりました。大変感謝申します。」

軽く一礼し、何のためらいもなく竜之介にお茶を出した。

それからまた少ししてまた声がした。

「大変遅くなりました、颯太に御座います。」

「お入り下さい颯太様。」

“様”？

篠矢以外の全員が一瞬顔を曇らせた。

颯太にもお茶が出されたところで篠矢が話し始めた。

「此度お呼び立て致しまして申し訳ありません。お三方様にお越し頂きましたのは、お三方様に大変大切なお話が御座いましてお呼び申し上げました。」

また3人共一瞬顔を曇らせる。

尚も篠矢は話を続ける。

話が続くに連れ、3人の表情がみるみるうちに引きつっていった。

3人が3人、コトバを失っていた。

「おるう様はこちらに来られたのはご記憶にあるかと思われますが、竜之介様・颯太様はまだ物心つく前に養子や里子に出されてしまったので全くご記憶にないと存じますが、お三方様どなた様も徳川の

血を引く方々に御座います。」

言われた直後、思わず各々にお互いの顔を見合ってしまっていた。

「お三方様各々に本家分家の違いは御座いますが徳川の人間であるコトには変わりません。」

依然として室内は異様な空気に包まれていた。

唖然とするしかない3人だった。

青天の霹靂　其の弐

篠矢が去った後、おるう・竜之介・颯太はただただ呆然としていた。

誰も何か話し出すワケでも無く、立ち去ることも出来ないでいた・・・。

《お三方様には公方様直結の隠密として、徳川家並びに江戸の町を護って頂きたいのです。》

この言葉が3人の呆然としている理由だ。

《代々将軍には隠密として忍が仕えますが、それとはまた別に江戸の町も含めて任せられる存在をお作りしたく、お三方様を幼少の頃より養子や里子にお出しになられてお出ででした。》

まさに青天の霹靂だった。

おるうは元々“いずれは徳川家を護って欲しい”と寺に預けられたが、まさかそんな役目を担うコトになろうとは思ってもいなかったハズだ。《言わば幕府ではなく、将軍直属の特殊秘密隠密とでも申しましょうか。》

“特殊秘密隠密”と一口に言われても、誰もいまいち理解出来ないでいる。

《あくまでも諜報活動が主となります故、人を殺める等と言うコトは一切御座いません。公方様も我が子にそんなコトをさせたくありませんから。ただ、悪を正して頂きたいのです。》

ただ一点を見つめる颯太。

《ですが、危険と隣り合わせになるコトは必至です。その為お三方様を修行にお出し致しておりました。それからお三方様が隠密だと言うコトは絶対に誰にも知られるワケには参りません。公方様の失脚に繋がりかねません。》

篠矢の顔が尋常ではなく険しかった。

3人も息を呑む。

「もし知られたら？」

颯太が声を震わせて尋ねたその答えは想像を絶するモノだった。

《万が一その様なコトが起きた際は、任務上にその的となる者に知られた場合であればどうにでもなりますが、不慮にも全く関係の無い者に知られた場合・・・》

篠矢の口が止まり、沈黙が流れた。

「任務失敗と言うコトですか？」

颯太が低い声で尋ねた。

それに対して篠矢はゆっくりと頷いた。

「すなわち自害するか相手の口を封じろと？。」

伊賀の郷でそう教わってきた颯太は、躊躇うコト無く言った。

竜之介の顔が凍り付き、何と無く予想していたおるうも眉間にシワを寄せた。
《ですが先程も申しました通り、諜報活動が主ですので、そんな事態にはならないとは存じますが、そうならないように細心の注意を払って頂きたくお願い申し上げます。》
3人は少し拍子抜けした。
篠矢が言うには、
〔手段は各々状況に応じて任せるが、最終目的は“世の裁きを正々堂々と受けさせるコト”であり、反論出来ないトコロまで暴き出すのが目的〕
だとのコト。
しょっぴくのはあくまでも奉行所の仕事。
ただ、奉行所が手を出しにくいトコロや目の届かないトコロを暴き出して、後は奉行所に任せると言うのが目的だと篠矢は告げた。
ほっとした空気が流れる中、颯太ダケはしかめっ面のままでいた。
「一歩間違えれば、自分の兄忍と刺し違えるコトになりませんか？」
とてつもなく低く、それでいて淡々とした颯太の表情に、竜之介とおるうは一瞬にして血の気が引く思いになった。
そのコトバに答えるコト無く、篠矢は

「お引き受け頂けるのであれば、今晩暮れ六つ時に再度この茶室にお越し下さい。お三方様がお揃いになるコトを願っております。」

と告げて去っていった。

その後は、今に至る。

沈黙が続くこと幾時ーーー

やっと口を開いたのは竜之介だった。

「ある日突然“オマエは徳川の人間だ”って言われただけでも動揺しきりだってのになぁ。」

呟くような口調で放った。

「俺だって同じだ。」

辛そうな颯太。

また沈黙が続く。

おるうの低めの怒号が長い沈黙を破った。

『だったらどうだっての？情けない！。男でしょ？』

男子2人は何も言い返せなかった。

あまりの威勢に驚いて、である。

『だいたい竜之介殿なんかちゃんと家族の元で暮らしていられたん

だから私や颯太殿に比べたらイイ方じゃないの？』

竜之介は全く以てその通りな発言に何も言い返せず、颯太は依然として呆気に取られていた。

『ましてや私なんて自分の素性を知っといて逢うコトすら儘ならなかったのよ？竜之介殿も颯太殿男なら男らしく黙って受け止めるくらいの器量は無いの？』

さすがに女子にそこまで言われて黙っていられる様な弱い男達では無かった。

「随分と肝の座った姫様だな。さすが武家の姫様だ。確かに姫様の言う通りだな。男らしく黙って受け止めるか。」

苦笑いを浮かべ、先に承諾したのは颯太だった。

わずかに照れて赤面するおるう。

照れ隠しにか、茶道具の片付けを始めた。

「やるしかない・・・か。武士として主君の命には逆らえないしな。」

半ば渋々感はあるモノの、竜之介も承諾し、ココに晴れて3人全員揃うコトとなった。

そして暮れ六つ時になり、再び茶室にはおるう・竜之介・颯太、そして篠矢の姿があった。

篠矢の手にしている行灯が室内をぼんやり照らす。

「お三方様全員お越し頂けたコト、大変有難く存じます。上様もさぞかし喜ばれるコトと存じます。」

穏やかに微笑む篠矢は話の後、驚きの行動に出た。

部屋の隅の半間の畳を徐に返し出したのである。

他の3人は声も出せずにただ目を丸くして驚いた。

さらに木戸を開けて3人を促す。

「このコトはここにいる我々だけの秘密に願います。くれぐれも口外なされませんよう。」

畳の下には通路がどこかに向けて繋がっていた。

呆気に取られたまま颯太が先に立ち上がり、おるう、最後につられるように竜之介が中に入った。

『いつの間にこのような…。』

低く狭い通路を軽く見渡しておるうが篠矢に尋ねた。

「お城の近くから上様の居室に繋がる隠し通路をちょっと拡げただけです。」

前を向いたまま篠矢が答えた。

低く狭い通路は篠矢の行灯の明かりだけで十分周りを照らせる程だった。

「この通路は上様の居室まで通じております。今後上様からお呼びが掛かった際は、この通路をお使い下さい。」

竜之介と颯太はさっきからずっと物珍しそうに上ばかり見ていてしきりにぶつかりあっている。

「寺の茶室はあの通り周りからは気付かれ難い場所ですので、話し合い等任務の際にお使い下さい。住職にはおるう様が皆に教える用の茶室だと申してあります。」

『えっ！』

初耳のおるう本人が一番驚いたようだ。

「すげぇ…。」

「よっしゃ！」

おるうの後ろから囁き声が聞こえた。

最近出来たばかりの茶室だが、寺の隅の、しかも竹やぶを中だけ伐採してそこに建てられた、何とも不気味な建物だとおるうは思っていた。

そもそも建てていたコトにすら気付かなかった程だった。

「上様にお目通り…ですか？」

竜之介の声が上ずっている。

無理もない。

何せお城に上がる時の様な出で立ちではないからだ。

「動き易いお姿でと申したのは私です。上様にそう伝えよと仰せつかって参りましたのでご安心下さい。」

立ち止まり、しっかりと竜之介の目を見て篠矢は言った。

「お連れ致しました。」

ずっと地下を歩いてきて、距離の感覚が全く掴めないままどうやら到着したようだ。

颯太は初めて見る上様に緊張しきり。

上様はしばらくぶりに見る我が子に感無量だった。

３人の姿を食い入るようにしばらく見たあと上様は、まず颯太とおるうに対して親元から離し寂しい思いをさせてしまったコト、竜之介に対しても今まで黙っていたコトを詫びた。

3人を各々に養子に出した理由を改めて話し、今回集めた理由を続けて話した。

3人はじっと黙ったまま聞き続ける。

「どんなに奉行所が江戸の町を護ってくれていようが、どうしても目の行き届かないトコロや手が出せないトコロが出てしまう。その様なトコロに目を向けて欲しいのだ。故に、諜報活動が主になる。機敏さ俊敏さ、器量の良さがモノを言うであろう。」

【オレに出来るんだろうか…。颯太はもちろん、おるうも問題無さそうだけど…。機敏さや俊敏さは別にして問題は器量の良さだ。】

まだ内心は不安だらけの竜之介は晴れない顔。

「とは言え、命の危険が無いとは言い切れん。颯太に至っては仲間と合い見えるコトにすらなりかねん。それを承知で三名揃ってくれたコト、誠に礼を申す。礼を尽くしても足るとは思えんが。」

そう言うと、上様は3人に向かって深くアタマを下げた。

上様にアタマを下げられるコトなど当然無い3人は狼狽えた。

直ぐ様冷静にアタマを下げたのは颯太。

『お止め下さい。』

慌てて止めに入ったのはおるう。

竜之介は1人ただ呆然となってしまっていた。

「ただ暴くと言っても何か標のようなモノがなければいかんと思い考えたのだが、これを使うが良い。ワシの息が掛かっているコトを証明するにはこれが良いかと思ってな。改良するならしても構わん。この札であればいくらでも用意できるからな。」

そう言うと篠矢が各々に黒塗りの箱を差し出し、一つ一つ蓋を開けて見せた。

一番上には木札が入っていた。各々が持っている紐付きの家紋入り木札と同じように家紋の焼印が押されている薄い木札だった。

3人は3人とも、自然と各々自分の首に下げている木札を襟の中から出し、見比べていた。

「あっ！」

竜之介がおるうや颯太も同じモノを持っているコトに驚いた。

「それは各々城を出す時に持たせた護符だ。祈祷してもらっておる。」

改めて木札のコトを聞かされ3人は繁々と木札を見入った。

「徳川の家紋入りである以上、容易には使わないで頂きたい。」

やっと篠矢が口を開いた。

「むやみやたらに使ってしまうと威力が無くなるだけでなく、悪用

されかねません。故にお三方様に置かれましても、使用には十分注意なさいませ。ご自分の素性が知られてしまう危険がありますので。また、ご自分の利害の為に使うこともご法度です。」

さすがの篠矢も凄んでみせた。

「いくら身内とは言え、無償でとは言わん。その都度報酬は出す。」

上様の真剣な表情に3人は揃って手を付いてアタマを深く下げた。

「それと颯太と竜之介には新しく住まいも用意した。明日にでも篠矢の家を訪ねるといい。」

平伏す竜之介の横で

「恐れながらお願いが御座います。」

颯太が口を開いた。

「私の実の家族に、自分のコトは明かさずとも構いませんし、私が一方的に一目見るだけでも構いませんので会わせて頂けませんでしょうか。」

おるうと竜之介はとっさに颯太を見た。

「私もお願い致します。」

つられた竜之介も一度上げたアタマを再び下げた。

篠矢と上様は顔を見合わせて微笑み、上様が答えた。

「容易いご用だ。早速明日にでも出立するがよい。」

颯太は安堵の表情を見せた。

颯太を見て神妙な顔をしたのは竜之介だった。

「そなた達はまだまだ若い。任務も諜報活動が主だ。諜報活動はやはり華麗に風のようにまた蝶のごとく舞うようにと言うコトで“花鳥風月”ならぬ、“華蝶楓月”と言う名はどうだろうか。」

“華蝶楓月”…。

3人は感嘆の声を上げた。

「実は札にもう刻印済なのだが。」

照れ臭そうに告白した。

上様に言われ木札を手にして裏を見ると確かに“華蝶楓月”と焼印がされていた。

『勿体無い程の立派すぎるお名前に御座います。』

笑みを浮かべておるうが言った。

続けて竜之介と颯太も軽くアタマを下げた。

「気に入ってくれるなら良いのだが。」

上様は少しの間、照れ臭そうにしていた。

颯天嬢おるう

その日は颯太も竜之介も篠矢の屋敷に泊まるコトになった。

その日のうちに竜之介・颯太の実の家を教えられ、翌朝明け方に出立し各々に産まれた家に向かった。

竜之介は水戸、颯太は尾張に各々向かった。

おるうはいつものように寺で子供達に読み書きなどを教えていた。

【考えてみれば、アタシは女子としては武芸が立つかもしれないけど、所詮颯太や竜之介よりは劣るわよね。精進しないと…。】

ふと考えた。

【刺し違えるコトは無いにしたって、実戦なんかしたコトないからなぁ。】

竜之介同様、おるうもまた引き受けたモノの一抹の不安は抱えていた。

授業が終わった昼過ぎ、おるうは町中にいた。

あるモノを探して、町を彷徨いていた。

【あっ！】

目の前でおるうはとんでもないモノを見てしまった。

咄嗟に男の腕を掴んだ。

「何すんだよ。」

男が言い出すのと寸分も違わずおるうは男に右手を広げて差し出した。

『今すった朱と紺の巾着、あのご婦人に返して。』

声はモノ凄く低く、表情はとびきりの笑顔で言った。

おるうは目の前でスリの現場を目撃してしまったのだ。

周りに気付かれないようおるうは静かに淡々と話す。

『落としたのを拾ったフリか何かして返してきな。』

男は若く、おるう達と同じくらいに見える。

巾着の色まで見事に当てられた男は、ぐうの音も出ない様子で、苦虫を磨り潰したような顔で渋々ふてくされながらも巾着を返しに走った。

おるうは最後まで笑顔を崩さなかった。

男がすった相手に返したのを見届け、何も言わず笑顔で立ち去った。

スリは自分の技に絶対の自信を持っている。

それを人に、しかも女子に見抜かれたなどとは言語道断だった。

ところが…

おるうの場合はちょっと違っていた。

何事も無かったかのように歩いていたおるうの肩に男は手を掛けておるうを呼び止めた。

「ちょっと。」

おるうは何の気なしに振り返った。

振り返るとそこにはさっきのスリの男がいた。

実はおるうのスリの見抜きは今に始まったコトではなかった。

何年か前に初めて目撃してしまった時はまさかと思ったが、その後も何度か目撃してしまい、次第に盗んだモノの色まで見抜けるようになった。

さすがに色まで見抜かれては相手(スリ)も引き下がるしかない。

しかもおるうは今までも、相手がすったものをすった人に返せば誰に言うワケでもなく済ませていた。

その為おるうは口も手も何も出さず、スリ本人にすった相手に返しに行かせるのが常だった。

言わば、“お人好し”である。

スリはもちろん犯罪として罰せられる大罪だ。

捕まれば間違いなく裁きを受ける。

“自分が奉行所に通告しに行ったトコロで相手にシラを切り通されたら自分の発言の信憑性を疑われる”と、おるうはあえて黙っているのだ。

“こんな小娘に見抜かれたら考えも変わってくれるかな”と言う僅かな期待を込める意味もあるようで…。

それゆえにスリからは一目置かれる存在になってしまい、今ではおるうはスリの間ではちょっとした有名人になっていた。

この男は初めて見る顔だった。

男に悪意は感じなかったので、おるうは黙って付いて行くと茶屋に着いた。

お茶を2つ注文し、座るなり男は言った。

「颯天嬢？」

おるうは照れ笑い気味に頷いた。

「参ったな。」

苦笑いの男。

「オレ、天太。」

照れ臭そうに天太はおるうに握手を求めてきた。

おるうは何の迷いも無く握手に応じた。

『よろしく。』

ちなみにおるうが自分が颯天嬢と呼ばれているコトを知ったのは最近だ。

2人の前を多くの人々が往来しているが、周囲はまさかこの2人がスリとそれを見抜いた町娘だとは思いもしないだろう。

ましてやおるうもこういう時は男に警戒心を抱くべきだろうが、全くと言って感じてなかった。

「噂にはあんたのコト聞いてたけど、噂通りの大したヤツだ。」

“敵ながら天晴れ！”

天太の心中はまさにそんなトコロのようだ。

『恥ずかしいわね。』

照れ隠しにお茶を一口、口にした。

「“まだ若い娘でとんでもなく目の良いのがいて、どんなに腕の立つ仲間も見抜かれて、最近はすったモノまで見抜かれる”って聞い

てはいたが正直信用してなかった。」

『でしょうね。』

おるうは失笑する。

「普通、現場を目撃されちまったら誰かに狙われてもおかしくないのにアンタはこの世界では有名だ。」

団子を頬張りながら男は続ける。

「こんな大勢いる人の中で何で分かる？」

興味津々な天太。

『上手くは言えないわ。自分が一番謎なんだもの。』

天太の皿から団子を一本取り上げた。

天太は何も言わず団子を目で追う。

『ごちそうさま。』

お茶を飲み干して立ち上がり、店員にお金を渡しておるうは颯爽と歩き出した。

「まいどぉ！」

店の娘の威勢の良い声に被って天太の声がした。

「おい！ちょっと待てよ」

何食わぬ顔で振り返るおるうに天太は焦り顔で言う。

「オレが金出すつもりだったのに…。」

天太は少し悔しそう。

おるうの素早過ぎる動きに戸惑いを隠せない。

『どうせ真っ当な銭じゃないんでしょ？』

こんなコトバもおるうは笑顔で言い放つ。

またしてもぐうの音も出ない天太。

構わずおるうは歩き出した。

今の一言はかなり天太の胸に突き刺さった。

天太はしばらくその場を動けなかった。

独りじゃない！

おるうは気を取り直して、“探し物”をする為歩き始めた。

【何が良いんだろう…。】

目に付くもの全てを自分の中で選別しながら歩くおるうの鋭い勘が反応した。

瞬時におるうの手は誰かの腕を掴んでいた。

「尋常じゃねぇな。」

天太だった。

「てめぇのは分かるのかなと思ってやってみた。背後からでも分かるなんて、何者だよ。」

溜め息をつくおるうに、何故か満足そうな天太。

「弟子にしてくれ！」

おるうは面喰らった。

しかも市中でのいきなりの土下座。

おるうの心拍数が急激に上昇する。

同時に急激に赤面。

『恥ずかしいからヤメてよ！』

激しく取り乱すおるうに天太はアタマが地面に付く程に土下座を続けた。

いたたまれなくなりおるうはその場を足早に立ち去った。

【ヤメてよ！】

まだ心拍数は速いままだ。

大きく溜め息をつく。

【何だってのよ！】

心なしか、歩き方が荒くなっている。

【ん？？？】

興奮している最中ながら、おるうは冷静にあるコトに気が付いた。

【もしかして？？？】

まさかとは思ったのだが・・・、

【でもねぇ…。】

竜之介よりも颯太よりも優れているモノ・・・、

それがこの瞬発力と動体視力と人間観察力では無いかと思ったのだが、、、

【まさかね！】

自分自身、あまり特殊には感じていないようだ。

気を取り直して探し物を続けた。

結局この日は探し物は見つからないまま家へと帰って来てしまった。

【それにしても何だったんだろ、アイツ…。】

ふと天太のコトがアタマに浮かんだ。

【弟子だなんて…。】

動揺している様子。

無理もない。

“弟子にしてくれ”なんて、初めて言われたのだ。

自分的にはごく当たり前に昔から出来ていたコトだけに、全く人より優れている自覚が全く無いだけに動揺を隠せない。

【それより、何か無いかなぁ…。】

アタマの中は、天太のコトから“探し物”のコトに切り替わっていた。

おるうは自分の普段の行動を思い返してみた。

【帯？……じゃぁ無いわよねぇ。締めちゃどうしようも無いものねぇ。】

おるうが昼間からずっと探しているもの、

それは、

自分だけの唯一無二の、“武器”だった。

“どう使いたい”とか、“どういう要領で使うか”など、自分の中でハッキリ決まっていない。

町に探しに出たのは、町に売っているモノで思い付かないかと考えたからである。

【そのうち思い付くかな？焦りは禁物ね！！】

切替の早さもまた、おるうの良さだった。

【だいたい目的が定まってないんだし。】

確かにその通りだった。

禁物なのは、焦りではなくアテの無い探し物である。

今日もまた町に来ていた。
今日はあいにくの雨。
にも関わらず、まだ見つかっていない“探し物”を見つけにやって来た。
「おるう！」
【ん？この声は…。】
颯太だった。
『お帰り！！今帰り？』
とたんに笑顔になった。
「あぁ。」
2人で自然な流れで茶屋に入った。
「いらっしゃい！」
『ご家族には逢えた？』
心配そうなおるうの表情に、颯太はフッと1つ失笑を浮かべた。
「人のコトなのに何て顔してんだよ！。」

失笑はおるうの表情についてだった。

「逢えたよ。正確に言うと見た。少し家を眺めて後は見物して帰ってきた。オレに記憶が一切無いからさぁ、どんなんか見て来るだけで良かったから。」

颯太の表情は晴れやかだった。

【颯太が満足ならいっか！】

おるうもまた、満足そうだった。

「竜之介は？」

颯太の問いに、おるうはただ首を横に振った。

「泊まってんのかな。」

『かもね。』

2人の脳裏には竜之介が浮かんでいた。

「それにしてもなぁ…。」

店を出て少しして、ぽつりと颯太が呟いた。

『ん？』

傾げるおるう。

浮かない顔の颯太。
実は颯太ですら、今回の“華蝶楓月”にはそれなりの不安を感じていた。
【颯太まで不安なんて…。みんな同じなのね。】
おるうは突然
『2人で稽古しよっか！』
と言い出し、颯太の手を引いて寺に向かった。
颯太は戸惑いを隠せないでいたが、何も言わず付いていった。
【ったく、この姫様は…。】
颯太は半ば呆れ気味で笑みを浮かべながらおるうの後ろ姿を見つめていた。

『でも意外だわ、あんたも不安だなんて。』
稽古の合間にふとおるうが言い出した。
「そりゃ先が見えないんだ、誰だって不安に決まってんだろ。」
おるうはハッとした。

“先が見えないから誰だって不安”

颯太の言う通りだった。

そしてそのコトバで気が付いた。

「竜之介だってきっと不安だろうよ。まぁ、アイツはまるっきり顔に出てたけどな。」

ハナで笑う颯太をヨソに、おるうは何も言い返せないでいた。

自分だけが不安に感じていたワケでは無かったのだ。

『アタシ、2人の足手まといになるんじゃないかってばかり気にしてた。』

正直に話した。

まだ逢ったばかりの人間に正直に話すなんて、おるう自身が一番驚いた。

すると颯太は剣を置いて縁側に出てしゃがんだ。

いつの間にか雨は上がっていた。

「自分の力がどれだけ通用するかなんて、オレだって分かんなくて不安だよ。」

空を仰ぐ颯太。

おるうの胸が一瞬ドキンとなった。

空を見上げる颯太の表情が嬉しそうに見えたからだった。

「でも今は、無性に嬉しくて仕方ねぇ。」

颯太の表情が、発言にウソが無いコトを証明していた。

見ているおるうまでもが嬉しくなっていた。

「これから毎日稽古するか！。竜之介が帰って来たら3人で。」

颯太の提案は、おるうも即同意して、決定となったのだった。

道

それから2人の稽古は毎日続いた。

おるうの寺子屋の授業が終わる昼過ぎから日が暮れるまで。

「熱心ですな。」

時折、住職が声を掛けてきた。

住職は、おるうや颯太が徳川の人間だと言うコト以外は何も知らない。

もちろん、“華蝶楓月”のコトも知らない。

内心ドキッとしながらもつられ笑いで返した。

その日の暮れ、竜之介が寺に顔を出した。

「竜之介ぇ！」

『お帰り、竜之介。』

2人の温かい歓迎に、竜之介は驚きと照れが入り交じり、うつ向いて小声で応えた。

「お、…おう。」

『楽しかった？』

颯太もそうだが、おるうも出逢って間もないのに気さくに声を掛けてくれてるコトにかなりの戸惑いを覚える竜之介。

特に颯太は篠矢の屋敷で一晩一緒だったがほとんど会話を交わさなかった。

なのにも関わらず、ほぼ初対面とは思えない程の温かさに動揺を隠せない竜之介だった。

「あ、…ああ。颯太は？また早かったな。」

戸惑いながらも、2人に合わせるように自分も何気無く努める。

「遠目から見るだけで後は見物して帰って来た。お前はゆっくりしてきたみたいだな。」

「そうなのか！？」

かなり驚く竜之介。

自分は屋敷に招かれ、手厚い歓迎を受け、何泊もしてきたと言うのに。

ただでさえ気弱なトコロがある竜之介は益々不安になってしまった。

【もしかしてオレ、遅れを取ってる？】

食材を持って帰って来た竜之介の提案でおるうの家で3人で夕飯を摂るコトになった。

そこで3人、改めてお互いのコトを話し合った。

思えば城でさらりと上様や篠矢が話したダケで、3人はお互いのコトを詳しく知らなかった。

「おるうは寺で育って、女子にしては剣に秀でている。颯太は伊賀で育ったから実力は相当なモノ。」

竜之介が一言一言確かめる様に言った。

「竜之介だって道場の倅として育っただろ？実力あるだろ。」

颯太のコトバに何も言えない竜之介。

怪訝な顔になっている。

「いつまでそんな顔してんだよ？オマエ、上様の御前でも同じ顔してたろ。」

高笑いした。

恥ずかしくてさらに深くうつ向く竜之介。

縁側に座る2人。

月明かりが2人を照らす。

見かねた颯太は失笑した後、ゆっくりと話し始めた。

「不安なのは自分だけだとでも思ってんの？」

ハッとして竜之介は顔を上げた。

月を見上げている颯太。

「姫様だってあぁ見えて弱気なコト、吐いてたよ。オレだって不安を漏らした。そしたらさぁ、姫様がオレの手を掴んで寺に連れてったんだ。それからだよ、２人で稽古を始めたのは。」

竜之介もまた、その時のおるうと同様にコトバが出なかった。

「アイツにも同じコト言ったけど、先が見えないモノはさぁ、誰だって不安だろ？オレだってアイツだって同じだよ。」

いつの間にかいたおるうが続けた。

『アタシさぁ、颯太に言われた後考えたんだ。何で３人なのかって。下手すりゃ忍育ちの颯太１人で良いだろうに、何ゆえ３人なんだって。』

おるうは２人の顔を見ながら話した。

『アタシね、２人の足手まといになるんじゃないかってずっと不安だったの。お城ではアンタ達にあんな威勢の良いコト言っといて何言ってんだ？って笑っちゃうだろうけどさぁ。』

颯太はハナで笑った。

おるうもフッと失笑して続ける。

『アタシ1人オンナでしょ？オトコ2人と一緒で何が出来んだろって。でも颯太の口から自分でもどこまで自分の力が通用するか不安だって聞いてさ。』

「上様がオレら以外の他にもそのつもりで養子や里子に出したヤツラはいるって言ってただろ？それでもオレらをお呼び下さったってコトは、オレらはそれなりに何かしら認められてのコトなんだろうからさぁ。」

颯太は竜之介に含み笑いを見せて締めた。

『3人な理由があるから3人なんだよ。1人じゃ出来なくても3人なら出来るってコトなんだよ。』

おるうも竜之介にとびきりの笑顔を見せた。

「そう言えば、竜之介って年いくつ？」

「・・・十五。」

あっけらかんとしている颯太にヒキながらもボソッと答えた。

『えっ？』

「えっ？」

3人が3人、お互いの顔を見合わせた。

『もしかしてみんな十五？』

目を丸くするおるうに竜之介も颯太も戸惑いながら頷いた。

竜之介の薄笑いにつられ、颯太もおるうも3人の間に笑いが起こった。

『よろしくね。』

「よろしく。」

「よろしく。」

3人はお互いをジッと見据えてゆっくりと頷いた。

翌日から3人の稽古が始まった。

終わらない明日へ

“華蝶楓月”結成から約十日が過ぎた。

3人の結束も実力も十日前とは比べ物にならない程に上がっていた。

公方様はそんな3人の様子を篠矢から聞いていた。

ある日の竜之介の登城の日ーーー

今までは父と2人での登城だったが今日からは1人。

竜之介は心無しか落ち着かなかった。

「よっ！竜之介。」

出掛ける支度をしていた竜之介の元に颯太とおるうがやって来た。

「2人共仕事は？」

驚く竜之介に、颯太とおるうは満面の笑みを浮かべている。

「肝っ玉のちっさい竜之介のコトだ、1人の登城はさぞかしびびってんじゃないかと思ってさ。」

赤面する竜之介。

『お見送りに来たの。』

竜之介は嬉しくて笑みが溢れそうになるのを必死で堪え、口が歪んでしまっていた。

「正面突破でお城に入れんのはオマエだけなんだから！ちゃんとしろよ。」

皮肉混じりの颯太のコトバも、竜之介は照れ笑いで返した。

“３人の代表”

そう思うと余計身が引き締まり、また違った意味で緊張する竜之介。

【仲間ってこんなにも良いモノだったのか…。】

竜之介は胸が熱くなる想いだった。

正直、いまだに“遅れを取った”と自責していた竜之介は、まだ２人に僅かな距離感を抱いていた。

“自分は２人に合わせるだけで後は何歩か下がって傍観”的な感じでいた。

だが、今こうして２人が何も言わなくても自分のコトを案じて来てくれているコトに、胸が熱くなると同時に、一線を引いていた自分が無性に情けなくも感じたのだった。

竜之介は途中まで２人に見送られ、城に向かった。

「１人で心細くは無かったか？」

上様に見事に指摘され、竜之介は笑みを浮かべ、凛とした顔で上様を見据えて答えた。

「3人の代表として参りました。途中まで2人が見送ってくれました。」

上様も笑みが溢れる。

「そなた達の結束力は篠矢から聞いておる。真のようだな。」

「正直、お恥ずかしながら先程までは2人に距離を置いておりました。」

竜之介の思いがけない告白に、篠矢も上様も一瞬戸惑いを見せた。

苦笑いで竜之介は続ける。

「颯太の方が自分より遠いハズなのにもう帰ってきていて、しかもおるうと修練をしていて。遅れを取ったコトと2人が既に馴染んでいたコトで引目を感じてしまい、距離感を抱いておりました。」

上様は優しく諭すような口調で話した。

「おるうも颯太も、家族の中で育って来た竜之介と違い、親が無く、同世代達の中で育って来た。故におるうと颯太が打ち解けるのは訳も無いハズだ。」

竜之介は上様のコトバに、強く衝撃を受けた。

「ましてや元々江戸に居たおるうや竜之介と違い、颯太は初めて伊

賀を離れ、誰も知り合いの無い江戸に来て出来た初めての仲間がおるうと竜之介だ。さぞかし嬉しかったであろう。」

更に強い衝撃だった。

頭を鈍器で殴られたような気がした。

【オレが一番恵まれてたってワケか！？オレが一番弱い人間だったのか？】

「人は誰しも弱さや孤独を感じている。だからこそ強く生きようとする。」

竜之介の胸を強く打った。

上様の穏やかすぎる自信と優しさに満ち溢れた表情に、竜之介は猛烈なまでの安心感を感じた。

篠矢は竜之介に微笑みながら優しく頷いていた。

城を出ると、塀に寄り掛かるおるうと竜之介の姿があった。

足を止めた竜之介の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「ご苦労さん！。」

『お疲れ様！！』

朝と同様、優しい笑顔の２人がいた。

溢れそうな涙を堪えるのが大変だった。

「あれ？あれれれ？？？」

竜之介の涙に気付いた颯太がわざとらしく茶化し出した。

空を見上げて涙を誤魔化す竜之介。

首を傾げるおるう。

竜之介は茶化す颯太を避けるようにわざと足早に歩き出した。

竜之介を追い掛け、颯太は追い付くと竜之介の肩に手を回してただ笑顔で合わせて歩いた。

そんな颯太に益々竜之介は胸が熱くなるのだった。

おるうもその少し後ろを黙って付いてきていた。

「お嬢ぉ！」

おるうはドキンとした。

イヤな予感がして、後ろを振り向けないでいた。

「お嬢ってば！」

颯太と竜之介も初めは気にならなかったが、再度声がしたので思わず後ろを振り返ると、しかめ面で足早に歩いてくるおるうがいた。

「お、…るう？」

困惑する颯太と竜之介。

おるうは無言で2人の横を通り過ぎ、おるうを追い掛ける男も通り過ぎる。

「もしかしてお嬢って・・・？」

竜之介と颯太は怪訝な顔で去っていくおるうを見ていた。

『しつこいわよ！。』

やっと立ち止まりおるうは叫んだ。

男は天太だった。

「お嬢？おるうが？？」

追い付いた竜之介と颯太。

颯太がすっとんきょうな声で尋ねた。

「・・・兄、、、貴？」

天太が颯太に向かって恐る恐る尋ねた。

『兄貴ぃ？』

目をつり上げるおるう。

おるうと全く同じ顔になっていた颯太は、天太の顔を良く良く見つめる。

挟まれた竜之介はきょとんとしている。

「天太ぁ？」

やっと口を開いた颯太は驚きの余り声が上ずった。

おるうの目が更につり上がる。

「兄貴ぃ！」

「天太ぁ！」

颯太と天太は驚嘆して思わず抱き合った。

おるうの深い溜め息を竜之介は見逃さなかった。

街

４人は近くの茶屋のイスに腰掛けた。
たびたび立ち寄る茶屋だ。
少なくとも颯太とおるうはすっかり顔馴染みになっていた。
「毎度！！」
店の看板娘もすっかり2人を憶えているようだ。
「3人、仲良いね。」
気さくに声を掛けてきた。
竜之介はドキッとした。
“３人”に反応したのだ。
「オレも？」
竜之介はとっさに問い掛けた。
驚いた顔をしていた。
ふと竜之介の顔を見たおるうは首を傾げていた。
颯太と天太が話に華が咲く中、竜之介はほくそ笑んでいた。

自分も入れての“３人”が、とてつもなく嬉しくてたまらないのだ。
竜之介の表情はしばらくほころんでいた。
おるうは気にしながらも、竜之介を黙って見守るコトにした。
穏やかな空気が流れる竜之介とおるうとは真逆に、颯太と天太は興奮状態で話し続けている。
天太も伊賀に居たコトがあり、天太が十の時に伊賀を離れた。
天太は颯太の一つ下で、颯太とは常に一緒にいて颯太を兄と慕っていた。
正に４年振りの、“運命の再会”だった。
「お嬢と兄妹？そうなのか！？じゃ、兄貴からも頼んでくれよ。」
天太が両手を合わせて颯太に懇願する。
颯太は唖然としている。
「何を？で、何でおるうがお嬢なんだ？」
おるうは慌てて２人に割り込んだ。
「良いから！。帰るよ。」
勢い良く立ち上がる。

天太がスリを働いたコトを颯太に知られたくないおるうの気遣いだった。

決して自分のコトを言われるのが恥ずかしいからなワケでも、弟子入りを断りきれないからでも無い。

気まずそうな天太。

と、その時おるうが突然人混みの中へ走り出した。

「来たっ！！」

興奮状態の天太。

竜之介と颯太はそんな天太とおるうの方を交互に見ている。

竜之介と颯太はおるうの後を追った。

「まさか颯天嬢に捕まっちまうとはな。」

悔しそうに顔を歪ませるスリの男。

「颯天…、嬢??」

きょとんとして顔を見合わせる竜之介と颯太。

男が居なくなったのを見て天太が駆け寄ってきた。

「いゃぁ、ウワサには聞いてたけどやっぱすげぇなぁお嬢は！。」

本人とおるうからしてみれば白々しい天太の発言。

「何が？」

不思議そうな竜之介と颯太はおるうを凝視。

「聞いた話ではお嬢はスリ連中の間ではかなりの有名人らしいぞ？“颯天嬢”って呼ばれてるらしい。まさかこの目で現場を見れるなんて幸運だよ。」

平静を装っているモノの、内心はかなりドキドキな天太。

颯太と竜之介は感心しきり。

「スリの瞬間を目撃するだけじゃなく、盗ったモノの色なんかも見えちまうらしいよ。だから颯天嬢。いやぁ～、あっぱれだよな。」

おるうは苦笑いになった。

竜之介も颯太もとにかく話に感心していて、天太の様子に全く気付いていない。

「それすげぇだろうが！冗談じゃねぇぞ！？」

颯太の目が飛び出しそうな程に驚いている。

「そうだぞ？おるう！下手すりゃ一番の武器かも！！」

竜之介まで大興奮。

「何が？」

すかさず天太が突っ込む。

「何でもねぇよ。じゃな、天太。」

颯太が然り気無く交わそうとしたが・・・

「冷たいコト言わないでくれよ！そりゃ無いよ兄貴ぃ。」

『はぁ？』（↑おるう）

「あぁ？」（↑颯太）

「えっ！」（↑竜之介）

3人全員眉をつり上げた。

「えっ…。」

3人が3人同じ表情なだけに天太は後退りしてしまった。

「オイラ、宿無しなんだよ。」

【ちょっと待てよ…。】

3人全員同じ思いだった。

「悪い、天太！オレら全員居候なんだわ。【ウソですけど！】」

とっさの颯太の機転に竜之介もおるうも心の中でも颯太に拍手した。

「【よっしゃ颯太！】申し訳ない！」（→竜之介）

「【颯太偉い！】『ごめんね！』」（↑おるう）

3人とも手を合わせて頭を下げながら謝る。

もちろん手で見えないが表情はほくそ笑んでいる。

「そっかぁ。じゃ、またな…。」

項垂れて去っていった。

寂しそうな天太の背中を見ながら3人は小声で言い合った。

『いくらなんでもアンタは避けちゃいけなかったんじゃないの？』

（↑おるう）

「どーすんだよ！」

（→竜之介）

「んなコト言ったって一緒に住むワケにいかねぇだろうが！」

ちょっとイラつく颯太。

「オレだって何とかしてやりてぇよ！」

颯太は吐き捨てて勢い良く逆方向に歩き出した。

「颯太！」

竜之介は颯太を追いかけた。

「先行ってて！」

そう叫ぶと何かを思い付いたおるうは大急ぎで天太の後を追った。

「おるう？」

困惑しながらも竜之介は颯太を追った。

『天太！』

とぼとぼ歩いていた天太に追い付くのは容易かった。

「お嬢。」

歩く姿とは一転、飛びきり嬉しそうな顔の天太。

『ちょっと付いてきて！』

そう言って天太の手を引き、ある場所へ向かった。

「さっきはありがとな。」

照れ臭そうに天太が言う。

『何が？』

何とも思っていないおるうは聞き返す。
「うっかりあのままいったらオレがスリやったコト言いかねなかった時、ごまかしてくれて。」
『そんなコト？』
おるうは全く気にしていなかった。
付いた先は一軒の建築現場だった。
『親方ぁ！』
おるうが声を掛けると1人の体格の良い、ちょっと強面な男性が来た。
『お久し振りです！』
おるうはその男に途中で買ったお酒を差し出した。
「何だよお嬢！手土産なんざ申し訳無い。こいつは？」
【お嬢？？】
呆気にとられる天太。
『天太。年は十四。腕っぷしは問題ないよ。宿無しって言うからさぁ、使いモンになるかわかんないけど、面倒見てもらっていいかなぁ…。』
「えっ？」

いきなりの展開に事態を把握出来ていない天太は戸惑うばかり。

「お嬢の見立なら間違いねぇだろ。分かったよ、任しとけ！！」

『厳しいけど人の善さは日本一だから、安心しな！』

と、おるうに言われても何一つ言われていない天太はおろおろする。

『親方も元々はアンタの大大先輩だったのよ。しばらく前に大工になって今じゃ棟梁様よ。この人なら大丈夫！面倒見てもらいな。せっかく颯太と再会出来て何一つ世話して上げられないのは申し訳無いからさ。アタシの弟子なんかより、こっちの方が何万倍も役に立つしね！」

自信たっぷりのおるうだった。

「お嬢…。」

感無量の天太の目にはうっすら涙が浮かんでいた。

「仕事はとにかく厳しいがヨロシクな！」

「は…、はい！」

ためらいながらも天太も答えた。

安心しておるうはその場を後にして竜之介と颯太の元へ急いだ。

おるうは度々元スリの世話係も買って出る。
これまでにも親方のトコロ以外にも、何ヶ所かに世話して貰っているのだ。
中にはおるうの通う寺に出家した者もいる。
おるうは“知る人ぞ知る”存在なのである。

『お待たせ！…あれ？』
急いで家に帰るとソコには置き手紙があった。
《竜之介の家にいる。》
息を切らしたままで、竜之介の家に急いだ。
「お帰り！主が居ないトコに居るのもなんだからって移動したよ。」
2人で夕飯支度をしているところだった。
着物の裾を捲りあげてカマドの火を焚いている竜之介が声を掛けてきた。
隣では竜之介が魚を捌いていた。
「どこ行ってたんだよ！！」

眉間にシワをよせる颯太。

『知り合いの棟梁のトコに天太を預けて来たよ。良いでしょ？』

「本当か？申し訳無い。」

「おるう、やるねぇ。」

アタマを下げる颯太と喜ぶ竜之介だった。

『気にしないで！弟子にしてくれってうるさいし。』

おるうは照れ笑いで返した。

「オマエは何者なんだよ。」

3人で食事中、笑いながら颯太が言い出した。

「本当だよ！凄いよね。」

竜之介も同意。

『スリの現場目撃したからってお上には突き出さないんだ。』

照れながら話し始める。

「はぁ？」

口にモノが入ったままの颯太。

『アタシみたいな小娘が言ったってスリ本人がやってないって言っ

たらアタシの信憑性ないだろうなってのがそもそもだったんだけど、アタシみたいな小娘に現場を抑えられたら足洗ってくれるかなって期待もあって。』

「おるう…。」

竜之介も颯太もコトバを失う。

『その代わり、落としたモノを拾ったコトにしたりとかして返しに行かせるの。だから足洗ってくれた人とかに知り合いが出来ちゃって、それが結構な人になってたりするのよ。』

「へぇ。」

深く感心する2人。

「それにしてもおるうのその能力は計り知れねぇぞ？そんなんが任務に就く自信が無かったなんて罰当たり極まりねぇよ、なぁ竜之介！？」

「ああ！、全くだ。」

竜之介、即答。

「しかもその人脈だって、かなりの武器になる日が来るんじゃねぇの？こりゃひょっとしたらひょっとするかもな。」

「あぁ。」

またも竜之介、即答。

『そうなの??アタシ、自分が出来てるから全く特異だと思って無かったよ。』

全く以てお気楽おるうである。

「ってコトはやっぱりオレが一番足手まといかぁ?」

1人で勝手に落ち込んでいる竜之介。

「またかよ竜之介!」

『そうだよ竜之介!何振り出しに戻ってんのよ!?』

おるうも颯太もさらっと流して食事を続けた。

大丈夫

【オレ、何で選ばれたんだろう…。】

おるうの話を聞いてから、すっかり自信喪失してしまった竜之介。

…と言っても元々一番自信など無かったのが竜之介かも知れないが。

その夜眠れずにいてしまった竜之介は翌朝明けてすぐ川辺に来ていた。

昔から何かあると来ていた川辺だ。

ここで川のせせらぎに耳を傾け、川の流れを見つめていると次第に心が落ち着いてくるのだと言う。

【颯太は伊賀育ち、おるうは凄まじいほどの観察眼と推理眼の持ち主。じゃあオレは？】

昨夜からずっと考えている。

夜も眠れない程に。

「あれ？兄貴ぃ！」

橋の上から天太が駆け寄ってきた。

天太からすれば竜之介も“兄貴”なのだ。

「おぅおはよう。」

力無い竜之介にすぐさま天太は反応した。

「どうしたんだ？ずいぶん覇気ねぇじゃねぇの？」

何も分かるハズのない天太はざっくばらん。

「あぁ。」

川を眺めたままでただ一言答える。

「川を眺めんのも良いけどさぁ、空を見上げんのも良いぞ！？今日みてぇな青空は特に気持ちいいぞ。」

天太は川沿いに寝そべって見せた。

呆気に取られながらも天太の真似をしてみた。

天太の言う通りだった。

「気持ち良いなぁ。」

気持ちがスカッとした。

【こんなに広い空から見たらオレなんか米粒みたいなモンなんだな。ってコトは米粒みたいなオレの悩みなんかちっぽけってコトなんだな。】

『竜之介？』

誰かの声で気が付いた。

どうやら寝てしまっていたらしい。

お日様はとっくにてっぺんまで昇ってしまっていた。

目の前にいたのはおるうだった。

『こんなトコで寝てたら誤解されちゃうよ！』

おるうが竜之介の体を揺り動かす。

「ごめん、つい。」

ゆっくり起き上がる。

『佛さんだと思われるでしょ！』

おるうに半ば強引に腕を掴まれて起こされ、渋々立ち上がる竜之介だった。

『天太に聞いて慌てて飛んで来たわよ！』

おるうがどこと無く涙目なのは気のせいだろうか。

竜之介はおるうの表情が気になって仕方無かった。

母上が良く見せた顔。

心配してくれてた時の顔だった。

確かにおるうは、一応、兄妹だ。

妹なのか姉なのかはさておき。

しかも同じ務めを果たす同志でもある。

…となれば、おるうが自分の母上と同じ表情を自分に見せるのは当然と言えば当然だ。

だが竜之介は一瞬ドキッとしてしまっていた。

『付いてきて。』

おるうはただ一言そう言うと黙って歩き出した。

途中、いつもの茶屋で握り飯を買って黙って竜之介に渡し、また歩き出す。

着いたのはおるうの通う柳庵寺だった。

「おるうねぇちゃん！」

境内で遊んでいた子供達はおるうの姿を見るなり一目散に駆け寄ってきた。

『竜之介お兄ちゃんです。ご挨拶は？』

自分達に見せる笑顔とはまた別のおるうの笑顔に竜之介は驚いた。
おるうのコトバに動揺する竜之介に、子供達はあどけない笑顔で挨拶してきた。
「竜之介お兄ちゃんこんにちは！！」
あまりの元気の良さに竜之介は圧倒された。
『今日は竜之介お兄ちゃんが剣術を教えてくれます』
「えっ？」
何も聞いていない竜之介は目が飛び出しそうな程に驚いた。
たじろぐ竜之介。
『篠矢様からのご命令です。』
おるうが小声で説明すると顔をしかめた。
子供の相手などしたコトがない竜之介はおどおどするばかり。
だがしかめっ面をしているにも関わらず無邪気に竜之介に接する子供達を見ているうちに少しずつ顔が和らいできた。
おるうは安心した様子で微笑みながら竜之介の様子を眺めていた。
“「竜之介様は御家族以外の年の離れた方と接した経験がほとんど

無く、それが竜之介様の欠点とお見受け致します。」”

“『欠点？』”

おるうは竜之介達の姿を見据えながら、篠矢との会話を思い出していた。

ある日の昼下がり、寺を訪れた篠矢がおるうに話を持ち出した。

おるうは篠矢の言っているコトの意味が分からなかったが承諾した。

“年の離れた人達との交流が無いコトが竜之介の欠点”？？

子供達と戯れる竜之介を見ていても意味が分からなかった。

…が、次第に今までに見たコトの無い笑顔に変わっていく竜之介が誇らしげに見えていた。

「良い顔してんなぁ、アイツ。」

颯太がやってきた。

『最初はガッチガチだったけどね。』

竜之介の方を見たまま苦笑い。

「コレがアイツの欠点克服になるんだ…よ、なぁ。」

どうやら颯太も分かってないらしい。

首を傾げている。

『アタシも良く分かんないけど、楽しそうだから良いんじゃない？』

2人でしばらく竜之介の姿をやんわりとした表情で見つめていた。

見上げてごらん夜空の星を

篠矢の提案はかなり功を奏した。

あれから竜之介は寺に通うようになり、子供達からもだいぶ信頼されるようになっていた。

一番驚くべきは、竜之介の表情から憂いや戸惑いが消えたコトだった。

コレにはおるうも颯太も驚きを隠せないでいた。

かと言って2人は竜之介の憂いや戸惑いを察知していたワケでは無かったが、明らかに以前とは違うコトには気付いていた。

「竜之介、明るくなったよなぁ。」

『アタシも思ってた。今なんかアタシより子供達に慕われてんのよ。嫉妬しちゃうよ。』

笑いながら茶屋のイスに座って話す2人。

今日は竜之介は登城の日だ。

いつものように竜之介を見送った後で2人で一服していた。

「おっ！お嬢。」

おるうが市中にいると度々誰かしらから声をかけられる。

たいていは年上の男性。
ほとんどが元スリだ。
みんな気さくに声を掛けていく。
おるうもまた、何の躊躇いもなく返す。
『こんにちは。久しぶり！』
毎度のコトながら呆気に取られてしまう。
大工に飛脚、瓦版の版元、目明しなど多種多様。
そんなおるうが元スリの面倒を見るようになったきっかけがあった。

『ちょっと行きたいトコロがあるんだけど…。』
お茶を飲み干してスッと立ち上がったおるう。
「ん？あっ、あぁ。」
おるうはスタスタと歩き続け、野菊を摘んである河岸に着いた。
たくさんの墓石の中で、小さな石が１つ並んでいた。
そこの前で立ち止まり、野菊を手向け、そっと目を閉じ手をあわせた。

ワケが分からないままつられて颯太も手を合わせる。

『アタシが、スリを逃がすきっかけになったのがこのコなの。』

今まで見たコトの無い、寂しげでどこか物憂げなおるうの表情に颯太はどこかしら胸が締め付けられる想いだった。

２人は川沿いに移動した。

『初めてスリを目撃した時は血気盛んになっちゃって、奉行所にしょっぴこうと思った。』

川の流れを見つめたままおるうは話し始めた。

『その時は２０代前半の殿方で。“息子が病なんだ”って言うのもお構いなしで強引に連れて行こうとしたわ。そしたら小さな男の子が後ろにぴったりくっついてたの。アタシ、全然気付かなくて。』

おるうの表情に目を向けたまま、じっと話を聞き続ける颯太。

『すんごい脅えるような目でアタシを見てたの。あの目は今も忘れない。』

少しの沈黙が流れる。

『その男の子、蒼白な顔してたからとりあえずはその男から盗ったもの返してもらったダケでその場は済ませたわ。』

依然颯太は黙ったまま。

『しばらくしたらその後父親が捕まったって聞いて、その後偶然そのコが亡くなったコトを知って。今日が命日なんだ。毎年来るようにしてるの。父親は流されてどこか判らないからって川沿いにお墓を立てたんだって。』

今にも泣き出しそうなおるうを見て颯太はコトバを詰まらせた。

『そこからだね。お上に突き上げるコトしないのも面倒みるのも。』

無理な笑顔を見せるおるうに益々胸が締め付けられる想いだった。

その頃、江戸城ーーーーー

今日は上様と篠矢だけでなく、お方様も一緒だった。

「おるうの母です。」

品のある、燐とした、また温かさを感じる、何処と無くおるうを思わせる雰囲気のお方様についつい見とれてしまった。

「おるう…様は実に女子とは思えぬ度胸の良さで我々を引っ張って下さいます。」

たどたどしく話す竜之介に上様も篠矢もお方様もクスッと笑う。

「また、お方様に似て大変温かく母のように我々を包んで下さり、かなり救われております。」

おるうを想いながら話す。

「そうですか。それは実に喜ばしい限りです。」

安堵の表情を見せた後、お方様はとんでもないコトを言い出した。

「実は…、」

お方様が竜之介の方に歩み寄り耳元で話し始めた。

「おるうがある人間に狙われていると言う情報が私の耳に入っております。」

竜之介は息を呑んだ。

「狙われていると言っても命ではありません。我々の弱味を握り、我が子を次期将軍のお墨付きを頂こうと、大奥で黒い影が蠢いているのです。」

血の気が一気に引く。

「お墨付きって・・・、次期将軍はもう決まってるんじゃ…。」

無礼なコトとは承知で、口を出さずにはいられなかった。

「決まってはおりましても、やはり上様のお子である以上、我が子を将軍にと母ならばお思いになられるんでしょう。」

篠矢が説明した。

「そんな・・・。」

呆然としてしまう。

「我々が動いても余計墓穴を掘るだけだ。動いている人間はココに記してある。と、言うコトでこの者達の動きを探りながらおるうを守って欲しい。」

一通の文と共に今回の依頼が言い渡された。

何とも言えない複雑な気持ちを抱えたままの竜之介。

とりあえず竜之介と相談する為に足早に城を出た。

出て間も無くしたトコロでいつものように笑顔の2人がいた。

「お疲れさん。」

『お疲れ様！』

竜之介の胸が痛んだ。

「どうした？」

竜之介はどうやら顔に出てしまっているようだ。

竜之介は近くの川に2人を誘った。

「指令だ。」

緊張した空気が漂う。

『茶室に行く？』

と、おるう。

「そうだよ、ここじゃ…。」

焦る颯太。

竜之介は大きく深呼吸。

「おるうが、、、」

意を決して話し始めたつもりが、コトバに詰まってしまった。

もう一度大きく深呼吸して再び話し始める。

「お墨付きの道具にされている。」

おるうはコトバを失い、颯太は激昂。

「どういうコトだよ！！」

2人ともかなり動揺しているようだ。

ココなら川のせせらぎの音で多少の会話は掻き消される。

茶室に行くまでの時間が竜之介としては勿体無く感じる。

この為竜之介は川岸に2人を誘った。

見当が付くのか、おるうは黙ったままだ。

颯太だけが興奮している。

「何でお嬢が関係あんだよ！関係ねぇだろぅが！」

『大奥なんてそんなトコよ。我が子の為なら何だって出来ちゃうのよ。』

おるうが小さな声で話し始めた。

竜之介も颯太もすかさずおるうに目を向ける。

『差し詰上様の弱味を握って自分の子にお墨付きを付けさせようって魂胆なんでしょ。』

吐き捨てるようにおるうが言った。

「そっくりそのままおるうの言う通りだ。」

苦虫を潰したような顔の竜之介。

すると颯太は突然立ち上がり石を拾い上げ、川面に向かって投げた。

「面倒くさっ。」

おるうも竜之介も何も言い返せなかった。

その後はいつものようにおるうの家で夕食を摂ったが、３人ともコトバ少なになってしまっていた。

「コレ、お方様から。」

食事が終わったトコロで、竜之介が一通の書をおるうに差し出した。

気遣う竜之介が颯太を誘い片付けを始めた。

おるうは縁側に出た。

「お方様って、お嬢の母上様か？」

おるうを気にしながら小声で颯太が尋ねる。

「ああ。いかにもおるうの母上様って雰囲気の、お美しくて燐とされていて強さが垣間見える、温かい奥方様だったよ。」

竜之介も小声で答える。

「考えてみりゃお嬢も母上様と離れ離れなんだよな。普段のおるうからは全然感じられないけど。」

ぽつりと竜之介が呟いた。

「あぁ。」

竜之介も一言、答える。

「でもさぁ、そー言うゴタゴタにお嬢を巻き込みたくないから城を出したんだろ？徳川を護る為に城を出されたんだろ？？何のためにお嬢は１人で頑張って来たんだよ！。」

再び興奮し出す颯太。

「しっ！」

竜之介は興奮する颯太を叱責した。

そぉっと振り向きおるうの様子を伺う。

おるうは空を見上げていた。

泣いていた跡も見られる。

『母上、お元気だった？』

空を見上げたままのおるうは涙声だった。

「あぁ。」

竜之介は微笑んで頷いた。

「母上様、何て？」

思い切って聞く颯太。

『城下にいるのに城内のコトに巻き込んで申し訳ないって。』

おるうの表情は見えないが、おるうの強さは感じられた。
しばらく3人で縁側で夜空を眺めていた。
『空って凄いよね。』
おるうの切り出しに、竜之介が続く。
「オレもこの前、天太が教えられた。」
「えっ？」
つい颯太は竜之介を見た。
「天太がそんなコトを？」
颯太は天太の意外な一面を見た気がした。
「アイツ、なかなか風情のあるコト言うじゃねぇかよ。オレ、夜空は今までに何度か見たけど何だか今日は違う空に見えるな。」
颯太がしみじみ言った。
この夜は一晩中、夜が明けるまで3人で夜空を眺めていた。
明日からの任務に備えて。

百花繚乱

明け方、上様から託された文を基に作戦会議を行い、この日は解散した。

数時間仮眠を取り3人は各々動き始めた。

おるうは人脈を活かして城下担当、

颯太は忍の業を活かして大奥担当、

竜之介は城内に詳しいと言うコトで城内担当。

それぞれの特性を活かした配置が吉と出るか凶と出るかは、神のみぞ知る。

上様の文によると、おるうの存在を探っているのは2人のお方様とその側近と何人かの年寄や目付達。

いずれも年頃の男子を持つお方様だ。

「そんなにてっぺん取りたいのか？」

ある日の茶室で颯太が呟いた。

『そりゃせっかく上様のお血筋を継いでる以上、お世継ぎにって思うのは母として当然なんじゃない？』

呆れ気味に答えたのはおるう。

「そんなもんか。」

何日か大奥に潜入して、床下や天井裏からではあるが大奥の裏側を見てしまっている颯太は半ばうんざり。

「幕閣にいる人間も同じだ。手が届きそうでなかなか届かないのがてっぺんだろ。だからこそ何をしてでも手に入れたいのが人間の欲求ってもんだろ。」

竜之介の発言に颯太は唖然とした。

颯太からしてみれば竜之介の発言とは思えなかったからだ。

竜之介も、竜之介なりに任務を遂行していく中で感じるモノがあるのだろう。

毎日城に潜入して、いろんな情報を入手するうちに竜之介なりの考えも出てきたのだ。

御鈴廊下で隔てられているハズの大奥と、幕閣の人間達がそれぞれの思惑の下に想いは違えど同じ目的で結託する。

「オレや竜之介も、養子や里子に出されなかったら今頃大人達の汚い考えに振り回されてたんだろうな。」

空を仰いで颯太が言った。

『その分、華蝶楓月頑張んないとね！』

凹み気味の2人に、いつも通りの調子でおるうが喝を入れに来た。
今回の任務で一番辛いのはおるうのハズ。
そのおるうが自分より明るく振る舞っているのに自分が落ち込んでいてどうするんだ！
竜之介と颯太はそれぞれに強く思うのだった。
と同時に、今更ながらおるうの強さに恐れ入るのだった。

ある日の任務中ーーー
颯太と竜之介が城内で落ち合っている途中、突然颯太が身を臥せた。
竜之介も合わせる。
険しい顔の颯太に戸惑う竜之介。
とりあえず気配を消してみる。
どのくらいの時間が経ったのか。
恐らく時間にするとほんの僅かな時間だったに違いない。
だが恐ろしい程の長い時間に思えた。
「城内には忍やそれに似た輩がいるんだな。」

小声で話す颯太。

「えっ？」

驚く竜之介。

「竜之介も気を付けろよ。今も感じた。オマエが感じなくても向こうに感じられたらマズイからな。」

竜之介は悪寒が走った。

「あ、あぁ。」

怯む竜之介だった。

「おっ！お嬢！！」

おるうが町を歩いていると今日も声を掛けられた。

今日は親方だった。

後ろには何人もの弟子がいた。

もちろん天太の姿もあった。

『お疲れ様！！今帰り？』

「あぁ。今お城に行ってんだ。」

おるうの胸が一瞬激しく揺れた。

【お城？】

気持ちとは裏腹に冷静を装い何気無く訪ねる。

「あぁ。補修でな。と行ってもお堀だけどな。」

【お堀か…。】

安堵半分、がっかり半分。

「じゃな！」

何の疑いもなく親方は去っていった。

「今日は兄貴達は？」

去っていく親方達とは別に1人天太は残っていた。

『行かなくてイイの？』

「あぁ。終わったからな。ちょっとなら平気だよ。おいら買い出しもあるし。」

『兄貴達は？って年がら年中一緒なワケでは無いわよ。お城の仕事はどう？』

おるうは然り気無く情報を聞き出そうと試みた。

外はすっかり暗くなっていた。

2人で帰路につく途中、竜之介がふと切り出した。

「颯太もオレも、上様の養子にならなかったら3人が集まるコトって無かったんだな。」

「何言ってんだ？藪から棒に。違う形で出逢うコトはあったんじゃねえの？オレか竜之介がおるうと夫婦になるとかな。」

軽い気持ちで言う颯太に、竜之介は取り乱した。

慌てふためく竜之介に颯太は引き気味。

「何だ？オマエ、お嬢のコト惚れてんの？」

これまた軽く冗談のつもりで言ったハズが、余計あたふたする竜之介に、颯太は察してしまった。

「そーなのか？」

「違っ！んなワケ無いだろぅが！」

竜之介は明らかに動揺している。

「惚れんのも無理無いけどさ、アイツはあくまでも同志なんだぞ？

しかも血の繋がりは無いにしても兄弟なんだぞ？ダメダメ！！」

竜之介は何も言い返せなかった。

「遊廓にでも行くか？」

「はぁ？？」

一気に冷や汗の竜之介をヨソに、竜之介の手を引いて足早に歩き出した。

「颯太！！」

颯太の手を振り払い立ち止まった竜之介は叫んだ。

「何言ってんだよ！」

竜之介の顔は真っ赤だ。

「ばぁっか！！任務だよ！」

真顔で答える颯太に拍子抜けの竜之介。

「へっ？」

“キツネにつままれた顔”とはまさに今の竜之介の表情のコトだろう。

「ちょっと気になるコトがあってな。」

ワケありそうな颯太の顔つきに竜之介は信じるしか無かった。

任務とは言え、やはり遊廓の異様な華やかさにただただ目を見張る竜之介。

「オマエ、早坂って目付知ってるか？」

颯太は耳元で囁いた。

視線はしっかり遊女に釘付けで。

「あぁ。早坂様が出没するのか？」

一気に動揺する。

早坂に見付かったらマズいからだ。

挙動不審に陥る竜之介。

「バカ！余計怪しいよ。」

然り気無く颯太はある路地裏に入った。

そこから屋根づたいに移動始めた。

竜之介は付いて行きながらも内心は心臓がバクバクしている。

暗い市中を屋根づたいに移動するコトはあるモノの、明るく賑やかな遊女街の屋根づたいに移動など、肝が冷えるくらいドキドキしている。

「誰が好き好んでこの街で上見んだよ。」

ある場所で止まり、颯太が言った。

「そっか…」

【確かに。】

竜之介は納得した。

ましてや2人の装束は真っ黒。

目だけ出ていて後は黒で覆われている。

上に着ていた着物も濃紺を基調とした、上様から頂いた着物だ。

「オマエはココに居ろ。オレは向かいに行くから。早坂が現れたら合図しろ。」

そう言って颯太は居なくなった。

竜之介がたじろぐ間に、あっと言う間に颯太は向かいの屋根に移動していた。

【落ち着けオレ！】

何度も言い聞かせて気を集中させる竜之介の目にあるモノが映った。

早坂だった。

必死に目で颯太に合図する。

颯太は着物を着てすかさず下に降り、竜之介と目で合図しながら早坂の後を追った。

竜之介は着物を着て、さっきの路地裏に戻った。

「兄貴ぃ！」

大通りから天太がやって来た。

まさに度肝を抜かれた竜之介。

「おまっ…。」

気が動転し過ぎてコトバが出ない。

「お嬢がさぁ、」

【へっっっ？】

天太のコトバに面食らった竜之介。

天太にコトの経緯を説明された竜之介。

おるうに仕事のコトを聞かれた天太は、仕事の休憩中に聞いた話をおるうに話した。

家臣達が廊下を往来している時に聞こえて来た話だった。

“「幕閣の方々でも吉原に行くらしいぞ」”

“「何でも“夏伊”って遊女が幕閣の方々の間で評判らしい。これがなかなか馴染みにしてくれないらしくて、誰が今一番に馴染みになるかで競ってるらしいぞ。」”

家臣達は天太達に聞こえているコトなど気付くハズも無い。

聞こえているコトが分かったら家臣達も声を潜めるハズだ。

「そしたらお嬢に、“夏伊って遊女に渡してくれ”って頼まれたんだ。」

そう言って手に持っていた巾着を見せた。

「おるうが？」

「あぁ。ただ、客がいたら困るから、何とか初会にこぎつけて、何も言わずにコレ渡せって。金もくれたよ。しかもオレみたいな若造が行っても門前払い喰らうだろうからって、“芝原”って番頭を訪ねろってまで教えてくれたよ。さすがお嬢だな。」

得意気に話す天太。

竜之介は驚いていた。

２人で芝原と言う番頭を訪ねると、驚きながらもある部屋に通してくれた。

天太は好奇心で目がキラキラしていて、竜之介は戸惑いでドキドキしている。

しばらくすると襖越しに声が聞こえた。

「あちきに何の様でありんすか？」

竜之介の心臓は飛び出しそうだった。

「お嬢から預かって来た巾着を受け取ってもらいたい。お嬢に叱られちまう。」

「お嬢？」

怪訝そうに聞き返す夏伊。

「おるう…。」

襖越しに小声で竜之介が答えた。

「おるう！？」

襖が開き、間からスッと手が伸びてきた。

天太が巾着を渡すと

「待っててておくんなんし」
夏伊はそう言うと襖を閉めた。
竜之介と天太は顔を見合わせた。
「巾着の中身って何なんだ？」
声を潜めて天太が竜之介に尋ねた。
「オマエが知らなきゃオレが知るワケネェだろ！」
竜之介も静かに反論。
「だいたい夏伊とおるうの関係も知らないし！！」
何処と無く声が荒くなる竜之介。
しばらくすると再び襖が開いた。
「名前は？」
夏伊の声がした。
「天太と竜之介。」
嬉々としている天太の声。
「天太殿、竜之介殿、おるうにコレを渡しておくんなんし。」

さっきとは別の巾着が差し出された。
するとまた襖が閉まった。
「おさらばえ。」
「えっ？」
動揺する天太。
どうやら夏伊は去って行ったようだ。
巾着を受け取るより先に動揺する天太の代わりに、竜之介が巾着を受け取って立ち上がった。
「行くぞ天太。」
呆然とする天太の手を掴んで竜之介は外に出た。
門の入口に颯太が立っていた。
「天太！？」
颯太がすっとんきょうな声を上げた。
「兄貴ぃ！」
２人は駆け寄ってなぜか喜び合うが…、
竜之介は２人に構わず歩き続けた。

３人が帰路に着いた頃にはすっかり夜が更けていた。

見つめていたい

翌朝おるうのもとに巾着を届けたのは、天太ではなく竜之介と颯太だった。

天太から強引に巾着を預かったのだ。

『おはよう、こんな早くにどうしたの？』

おるうはまさか竜之介と颯太が天太の代わりに来ているとは思わず、きょとんとしている。

「これ…。」

渋い顔のまま竜之介がおるうに差し出した。

おるうの顔がひきつる。

「中、入んぞ。」

固まるおるうの横を颯太がすり抜けた。

おるうが呆然としながら巾着を受け取ったのを確認した竜之介もおるうの横を通り過ぎた。

『どういうコト？』

おるうも後から中に入る。

「こっちが聞きてぇよ。」

ふてくされ気味の颯太。

慌てて仲裁する竜之介。

「吉原で偶然天太と会ったんだよ。颯太が気になるコトがあるからって行ったらホントに偶然。」

おどおどしている竜之介。

「内偵中に早坂の名前が出てな。早坂を調べてたら吉原に通じてるって言うから行って見たんだよ。」

ぶっきらぼうに颯太が答えた。

「おるうは？」

様子を伺うように竜之介が尋ねる。

『昨日たまたま天太に会って、そこで夏伊の話を聞いたのよ。幕閣の間で夏伊が評判だって。たまらず天太に遣いに行ってもらったのよ。』

颯太の態度に納得がいかないおるうもぶっきらぼうに答える。

3人の間に異様な雰囲気が漂う。

「そうじゃねぇだろ。んなこた分かってるよ。」

背中を向けたままの颯太。

声が荒くなる。

「颯太！」

竜之介が制止する。

「夏伊って花魁と知り合いなんだね。」

ひきつり笑いでやんわりと言う竜之介。

『そうよ！？寺で一緒に育った仲間よ。たまに夏伊のトコの番頭さんを通じて連絡を取り合ってるの。』

おるうのコトバに竜之介と颯太は目を丸くした。

「2人とも何か分かったんでしょ？ホラ会議しよ。」

明るく努める竜之介。

「オレは…、」

コトバにつまる颯太。

その間おるうは夏伊からの文を読んでいた。

『アタシは夏伊にとりあえず情報収集を頼んだわ。幕閣が一番乗りを競う程の高嶺の華の夏伊なら簡単に聞き出せそうだから。もちろん華蝶楓月のコトは出してないわ。』

「颯太は？」

依然、仲裁役の竜之介。

「あっ、えっ…。」

なぜかしどろもどろ。

「すまん、分からなかった。」

とても言いづらそうに呟いた。

実は颯太は嘘をついているのだ。

分からなかったワケでは無かった。

言えないのだ。

竜之介にも話していない。

と、言うより竜之介には話せなかった。

おるうは颯太の様子から異変を感じ取っていた。

それがはっきり何かは気付いてはいないようだが…。

「じゃ、オレ行くワ。」

竜之介が立ち上がった。

『よろしくね！。』

おるうも立ち上がり、竜之介を見送りに出た。

颯太はしかめっ面のまま立とうとしない。

「颯太？」

振り返り、竜之介が声を掛ける。

「あ、…あぁ。ちょっと天太のトコロに寄ってから行くワ。また後で。」

考えこんでいた颯太がとっさに答えた。

「じゃな。」

何食わぬ振りで竜之介は出ていった。

『行ってらっしゃい！』

竜之介を見送り戻ってきたおるうに颯太は低い声で切り出した。

「あのさぁ…」

おるうは一瞬にして感じた。

“竜之介には言えないコトがある？”

と。

何も言わずおるうは颯太の前に座った。

「水戸が・・・・」

うつ向いたままか細いこえの颯太。

こんな颯太は今までに見たコトが無かった。

「目付の早坂は、志摩の方様の側近の今林の遣いで・・・」

また言うのを止める颯太。

『志摩の方様？』

おるうを狙っている側室のうちの1人だ。

しばらく沈黙が続く。

「早坂は今林の遣いで、どうやら水戸と結託してオマエを狙ってるようだ。」

おるうは絶句した。

またしばしの沈黙。

「どうやら竜之介と・・・」

また沈黙。

おるうは察した。

『竜之介とアタシを夫婦にしようって？』

低い声で尋ねた。

颯太は小さく頷く。

おるうは小さく溜め息をついた。

『天下一ね、ソレ。』

失笑するおるう。

『ちょっと思い付いたわアタシ。作戦変更ね。』

おるうは言った。

唖然とする颯太。

『内偵で幕閣の吉原の件、もっと詳しく、いつ誰が行くかとか調べといて。』

「あ？あ、…あぁ。」

ワケが分からぬまま、颯太は言われるがまま内偵に向かった。

“『竜之介の耳に入るのも時間の問題よね…。竜之介は八重の方様周りだけに回ってもらった方がいいわね。』”

おるうの家を出る間際におるうと話し合った結果、そう決まった。

竜之介は家族と直接面会してきただけに、このコトを聞いたらひどく動揺するだろうという2人の配慮だ。

その頃、城内の竜之介ーーー

【オレも何か有力情報入手出来ねぇかなぁ。】

颯太が情報を掴んで帰ってきたコトに、少しだけ嫉妬してしまっていた。

【まあ、焦ったって良くないし。平常心平常心!】

自分に言い聞かせて内偵を続けた。

まさか自分の実の親が実は今回の任務に絡んでいるとも知らずに・・・・

『あれ?竜之介。』

寺子屋の授業の合間、おるうが畑の世話をしていると竜之介がやって来た。

「竜之介兄ちゃん!」

気付いたコドモ達が竜之介に駆け寄ってきた。

『お疲れ様！』

おるうは竜之介の姿をみてどことなく胸が痛かった。

【水戸の竜之介のご両親がアタシを竜之介の嫁に…】

そのコトを考えずにはいられなかったからだ。

竜之介に特別な感情を抱いているワケでは無い。

かと言って颯太にそう言う感情を抱いているワケでも無かった。

むしろ2人に対してはそんな感情は一切持っていなかった。

あくまでも義理とは言え兄弟として、同じ志を持つ仲間としてしか2人のコトをみていなかったからだ。

その頃、1人大奥の颯太もまた、複雑な感情に襲われていた。

以前の竜之介の態度を思い出して…。

軽い気持ちで言った颯太のコトバにひどく動揺していた竜之介。

【やっぱりアイツ、おるうのコト・・・】

そう思うと、どういうワケか颯太まで胸が傷んでしまっていた。

“「オレかオマエがおるうと夫婦になるとかな」”

【まさかアイツがあんなに動揺するなんて思わなかったからあんなコト言っちまったけど、オレ、何であんなコト言っちまったんだろう…。】

今更ながら己の発言を悔やむ颯太だった。

【それにしてもおるう、あんな事実聞かされた後でも平然としていられんだから大したもんだよなぁ。しかも何か思い付いてるし。】

竜之介に対してもおるうに対しても言い様のない思いを感じてしまっていた。

数日後、おるうと颯太は2人だけで茶室にいた。

夏伊を狙っている幕閣の人間数人のうち、おるうを狙っている側室の志摩の方の側近の今林、八重の方の側近の近藤が両方いるコトを颯太の内偵と夏伊の情報収集で突き止めたコトを受け、作戦実行の打ち合わせを行っていた。

もちろん、竜之介には知らせていない。

「竜之介は？」

『今日はお城のハズよ。多分大丈夫よ。』

2人は竜之介の耳に、今回の任務に竜之介の実家が絡んでいるコトが入らないコトを願っていた。

“竜之介のコトだから知ったら大変なコトになる”

と、気を揉んで仕方無いのだ。

『夏伊には天太を通して伝えてあるわ。颯太は屋根裏で待機していてね。』

紙には夏伊の遊女屋の見取図と今林と近藤の名が書かれている。

「しかしおるう、本気でやんのか？」

乗り気じゃない颯太。

『不満？』

含み笑いのおるう。

「いゃあ…、なぁ…。」

煮え切らない颯太。

無理もなかった。

いくら任務とは言えおるうのそんな姿を見たくはなかったからだ。

『アタシはかなり楽しみよ！こんな事、したくたって出来る事じゃ

ないもん！』

颯太とは対照的に興奮気味の颯太。

「しかし良く許可取れたよな。やっぱりおるうの人脈は任務遂行の武器になるよな。」

一転、感心する颯太。

本来なら今回のこの作戦は出来るハズのない作戦だ。

遊女屋にも顔の利くおるうにしか出来ない業だろう。

『アタシだって日頃の行動がこんな形で役に立つなんて思ってないわよぉ。』

浮かれ気味に鏡で自分の顔を見てばかりのおるうに颯太はしかめっ面で凝視していた。

「上様やお方様が見たらどう思うコトか・・・。」

この期に及んでまだ割り切れない颯太におるうはガツンと言い放った。

『何なのよさっきからハッキリしないわねぇ！大体何でアンタがそんなにハッキリしないのよ。』

初めてじゃないとは言え、何度経験してもおるうのこの迫力には男

の颯太も怯えてしまわずにはいられなかった。

【確かにオレ、何でこんなにモヤモヤしてんだろう。…いや、当たり前だよ。】

颯太は颯太で、煮え切らない自分自身の葛藤と闘っていた。

その頃お城の竜之介ーーー

「任務は順調に進んでおります。」

「左様か。そなた達の事、無事に遂行してくれると信じておる。」

稽古を終え、上様と篠矢に報告中の竜之介。

「近頃、水戸の竜之介の父上からしきりに竜之介の婚儀の話を持ち掛けられて困っておる。」

竜之介は絶句して心臓が強く揺れ動きそのまま硬直した。

「なぜワシに申すのか分からぬがな。」

上様の眉間にはシワが寄っていた。

「今別の者に調べさせておりますが、怪しい気がしてなりません。」

篠矢も神妙な面持ち。

竜之介の脳裏にはおるうと颯太の顔が浮かんでいた。

「想う者はおるのか？」

上様の突飛もない発言に激しく動揺する竜之介。

「おりません！」

強く反論してしまった。

脳裏にはおるうの顔を浮かべたままで。

「も…、申し訳ありません！」

上様と篠矢は顔を見合せてほくそ笑みを浮かべていた。

竜之介は動揺し過ぎて、水戸の実父の狙いに気付く事など出来なかった。

明日があるから

『お疲れ様！』
「お疲れぃ！！」

いつもの場所に、２人はいた。

２人と出逢ってから、一度も欠くコトなく登城の日は見送りも出迎えも２人で揃って来てくれている。

最近慣れてきていて、当たり前に感じ始めていたが、今日は何だか気持ちが違った。

いつもなら意気揚々とお城でのコトを話す竜之介も、今日は黙々と歩いていた。

「どうした？」

竜之介の顔を覗き込む颯太。

「父上が…」

消え入るような声でボソボソと話す竜之介。

「あ゛？」

しかめっ面で聞き返す。

「ちょっと藩邸行ってくる！」

荷物を颯太に渡したかと思うといきなり竜之介は猛烈な勢いで走り去っていった。

「何だ？アイツ…。」

呆気に取られる颯太に、眉間にシワを寄せたおるうがしばし考えて言った。

『ごめん颯太、後追って！。もしかしたらアイツ、気づいたかも！！』

颯太の荷物を受け取ると、

「分かった！。」

顔をギョッとさせながらもするりと身を返しすぐさま後を追った。

【まさかねぇ…、んなワケ無いわよねぇ。】

うつむき気味で案じながらおるうは1人自分の家に向かった。

「竜之介！」

やはり元忍には敵わなかった。。。

すぐに追ったのがよかったのだろうが、やはり素早さは颯太が一番だった。

「颯太…。」

かなりの浮かない顔。

竜之介は速足で歩き続ける。

颯太が竜之介の腕を強く掴んで竜之介を引き留めた。

渋々竜之介は話し始めた。

思わず吹き出す颯太。

「颯太？」

颯太の顔が心なしか赤くなっていた。

「誰と？」

颯太の声がうわずった。

「相手は分からない。もしかしたら父上はオレ達が華蝶楓月だって気づいたのかと思っていてもたってもいられなくて。。。」

うつむき加減に話す竜之介に颯太は心の中で突っ込んだ。

【そっちかよ！トンだ取り越し苦労だったぜぃ。】

うっすらはにかんだ。

「オマエさぁ、そんな血相で行って何て言うつもりだったんだよ！何て言おうが墓穴掘りに行くようなモンだろ、少し落ち着けよ。」

颯太は内心、安堵していた。

【とりあえず今回は大丈夫みたいだな。】

颯太のコトバに竜之介は背中を丸めた。

「さっきの勢いで行ったらポロッと言い兼ねないぞ？篠矢様に任せとけよ。」

竜之介の肩を叩きながら。

2人は歩き出した。

「でもさ、こうも思うんだ。おるうを諦めるためにも婚儀の話があるなら受けても良いかなって。」

竜之介のとんでもない発言に颯太は再び吹き出した。

「んなコトしたら華蝶楓月どーすんだよ！何言い出すんだよ…。」

颯太の心臓はかなり高速振動していた。

「そっかぁ。」

【“そっかぁ。”じゃねぇだろが！】

「先行っててくれ。ちょいと天太に用あったの思い出したワ。」
唖然とする竜之介をヨソに、颯太は逆方向に走っていった。
竜之介は首を傾げながらも1人歩き続けた。
颯太は城に向かっていた。
決して天太に用があるワケでは無かった。
篠矢と上様に報告するためにだった。

【竜之介、大丈夫かなぁ…。】
おるうは1人夕食の支度をしていた。
竜之介のコトを気に掛けながら。
と、その時、外に気配を感じた。
とっさに懐刀に手を伸ばすおるう。
窓の外から吹矢が飛んできた。

すかさず避けたが、おるうの頬をかすめてしまった。
吹矢の先には水戸の家紋がついていた。
仰天のあまり、おるうは身動きが取れずに立ち尽くしていた。
「ただいまぁ。」
竜之介の声に、我に帰る。
慌てて矢を隠した。
「おるう！」
手で傷を隠していたモノの、指の隙間からうっすら漏れる血に気付き、竜之介は慌てて駆け寄った。
【ヤバい、矢が！】
『大丈夫！ちょっと包丁の刃が…。』
ウソにも程がある。
竜之介は縁側に干してあった手拭いを取り、おるうの傷の手当を試みた。
【大丈夫。顔洗ってくるから。】
竜之介に背中を向けずに桶に向かった。

後退りの途中、さりげなく矢をかまどに放り込んだ。

傷に冷水がやけに凍みた。

【いっつ～。顔に傷ついちゃったら下手に動けないじゃない！！どうしよう…。】

水面に映る自分の顔に心の中で問い掛けた。

戻ると竜之介の姿は消えていた。

『竜之介？』

呼んでも捜してもいなかった。

【どこいったのかしら。】

外に出て見たかったが、念のため諦める。

まださっきおるうを狙った人物がいるかも知れないからだ。

とりあえず支度を続けるコトにした。

竜之介が薬屋にいたトコロにちょうど颯太が通り掛かった。

「何だよ竜之介。」

颯太の声に気付いた竜之介は物々しい形相で話した。

「バカ！何で1人にすんだよ！！まだ近くに刺客がいるかも知れねぇだろ。」

颯太のコトバに竜之介は唖然とするしか無かった。

「おるう！」

血相を変えた颯太が騒々しくも帰ってきた。

『お帰り！』

何事も無かったかのように平静を装うおるう。

「大丈夫か？」

すごい剣幕でおるうに駆け寄った。

傷が痛々しかった。

「今、竜之介が軟膏持ってくるからな。」

必死の形相の颯太におるうは思わず吹き出して微笑んだ。

『大袈裟ね。』

目にはうっすら涙がにじんでいた。

「おるう！」

間もなく竜之介も帰ってきた。

いつの間にか外はうっすら暗くなっていた。

竜之介はまだ“あのコトに気付いていない”コトを颯太から聞き、おるうは安心した。

「おるう、しばらく外に出られないなぁ。」

食事しながら。

「オレ、しばらく付いてるよ。」

竜之介とは思えない程の実に思い切った発言に颯太は驚いた。

が、瞬時に思った。

【下手に動かれるよりは竜之介が知らずにすむから良いか。】

「おう！そうだな。オレ1人で頑張るよ。」

『ダメよ、こもってたって解決にはならないわ。さっきの刺客を突き止めないと！』

何ともおるうらしい発言だった。

『側に誰かいるコトが知られたら相手だって警戒するし、そもそもアンタ達がアタシの周りにいたらアンタ達だって危ないわよ。』

「そっか。そうだね！。」

神妙な顔で竜之介は納得したが、颯太はそうじゃなかった。

【ぁんだよ、竜之介の一世一代の勇気だったろうに…。】

ところが、颯太は内心ホッとしていた。

【ん？オレ、何ホッとしてんだ？】

自分でも分からなかった。

「じゃ、しばらくお城の内偵は休止だね。」

竜之介が決意したように言った。

「あ、…あぁ。」

颯太には何処と無く竜之介が大きく見えた。

唖然として返事にもためらいが出てしまっていた。

『華蝶楓月の存在まで露呈しかねないから。十分注意しないと。』

おるうの発言に、一瞬にして緊張した空気が流れた。

「じゃ、あの作戦は延期…だな？」

心無しか、顔がほころんでいる颯太。

ポカンとする竜之介。

「あの作戦？…」

『仕方無いわね。せっかく決行寸前だったのに！』

颯太とは反対に、おるうは物凄く悔しそうだった。

『あっ！！代わりに颯太やってよ！！！・・・いゃ、竜之介の方がいいかしら。』

「えぇぇぇぇ？？？？？」

颯太は叫びすぎて叫んだ後咳き込んでしまった。

が、きょとんとする竜之介の顔を改めて見てみると、確かに竜之介の方が似合いそうだった。

骨格と言い、顎の線と言い、申し分無かった。

「良いかもな。」

腕組みをして頷く颯太に依然として竜之介はポカンとしている。

『じゃ明日、決行ね！』

満足そうな表情のおるうは竜之介の肩をポンと1つ叩いた。

『よろしくね。』

竜之介はこの時、おるうの笑顔の意味が分からなかった。

が、とりあえず返事はしてしまうのだった。

1日だけの、“花魁竜之介”の誕生が決定した――

幸せになりたい

翌朝ーーー

決行は夜、吉原で

とだけ聞かされた竜之介は、ワケが分からないまま、寺で子供達に剣術を教えていた。

寺の隅ではおるうが畑の手入れをしている。

少し離れたトコロには颯太の姿があった。

気配を消して、草むらに隠れていた。

いつでも刺客に対応出来るようにだった。

【とは言え、昨日の今日で、現れんのか？でも、ここまで来たらもう時間は無いよな。】

1人で悶々と自問自答を続けていた。

ふと顔を上げると、視線の先には優しい笑顔で畑仕事をしているおるうがいた。

気が付くと颯太は視線を止めておるうに見入ってしまっていた。

【気が強くて姫らしさの欠片もないこんな女、竜之介も物好きだなぁ。】

そう言いながらも、颯太はおるうから目を離せないでいる。

気持ち、心臓がドキドキしているコトに、本人は気付いていなかった。

【でも、いざとなるとおるうの花魁姿、見れなくて残念だったかも。】

颯太は今さらながら後悔していた。

あんなに躊躇していたハズなのだが…。

【でもアイツ、大丈夫かなぁ。見てくれが似てるからったってなぁ…。】

視線はおるうの元へやってきた竜之介に移っていた。

【竜之介、嬉しそうな顔してるなぁ。】

昨日の竜之介の発言を思い出していた。

【あれ？オレ、動揺してないか？しかも何だ？このヘンな胸騒ぎは…】

無意識のウチに左胸の辺りに手を当てていた。

！！！！！！！！！！

気配を感じた。

おるうも感じたらしく、走って寺の外に走り出した。

颯太は気配の方へすかさず吹矢を飛ばした。

幸い、寺の人達には被害も影響も及ばずに済んだ。

吹矢は腕に命中した。

すぐさま刺客を追い掛けた。

何事が起きているのか全く把握出来ていない竜之介。

おるうを追って寺の外に駆け出してみると、塀の端におるうの着物が脱ぎ捨てられていた。

おるうは中に装束を着ていたのだ。

竜之介は、おるうの着物を拾って急いでおるうの家に向かった。

竜之介の心臓はかなり激しく揺れ動いていた。

【今からオレが追い掛けても追い付くハズがない！どうしたら…。】

迷いながらもおるうの家に向かう。

主のいない家はひっそりとしていた。

こっそり、忍び足で中に入る。

軒下にそっと置いて帰ろうとしたその時ーーー

玄関先に矢文があるのを見つけてしまった。

竜之介は矢文に水戸の家紋を見つけ、その場から動けずにいた。

【どうして？】

動揺し過ぎて手が震える竜之介。

たまらず矢文を持ったまま、藩邸に向かって走り出した。

【ん？】

向かう途中の自分の家の前に、この辺の景色には似つかわしくない、豪華な駕籠が止まっていた。

【父上！】

駕籠の家紋に気付いた竜之介は全力疾走で家に入った。

「父上！！！」

息を切らしている。

父は悠然と縁側に腰掛けていた。

『竜之介、待っておったぞ。』

余裕の笑顔の父。

周りには御付の家臣がたくさんいた。

「私も今、藩邸に参ろうと思って向かっていたところでした。」

道行く人々は、この辺で見るコトの無い物体に、じろじろ見ながら通りすぎて行く。

「ココでは目立つだろう。藩邸に参ろう。」

父は立ち上がり、駕籠へ乗り込んだ。

竜之介も黙って後を付いていった。

颯太とおるうは竹やぶにいた。

颯太はすぐに刺客に追い付いたのだが、人目に触れるのを避け、竹やぶまで追い込んだのだ。

おるうは見失わないよう、遠くの2人に追い付くだけで精一杯だった。

やっとのコトで2人の元に追い付いたおるうは肩で息を切らしながら顔を歪ませて2人の様子をただ見ていた。

2人の目にも止まらぬ動きの素早さに、おるうは息を呑むしか無か

った。

頭巾の膨らみを見ると、どうやらやはり女子のようだった。

上衣では判断出来なかったが、“恐らく女子だ”と言う確信をおるうは持っていた。

一進一退を繰り返す、目にも止まらぬ壮絶な攻防戦。

おるうはただただ見ているコトしか出来なかった。

こんな息をも吐かせぬ格闘場面を目の当たりにして、おるうは体に震えを感じていた。

竜之介も刺客も全く互角だった。

【ホントに女なの？】

目をつりあげ2人の動きを睨むようにして見続けた。

ふとしたコトで、闘いは急展開を見せた。

若干、刺客の動きに乱れが見えてきて、付かず離れずを繰り返すウチに刺客の頭巾が破け、顔が出てしまった。

「楓…。」

ホンの一瞬、颯太にも動揺が見られた。

【楓？まさか仲間？】

おるうもまた動揺せずにはいられなかった。

見られてしまった刺客“楓”は表情は変えないモノの、動きにはかなりの動揺が見られて、あっという間に颯太が優勢に立ってしまった。

颯太が短剣を振りかざすまでに時間は掛からなかった。

おるうが走り出すのと颯太が刃を楓の前で寸止めするのと、ほぼ同時だった。

「オマエが捜してるヤツは残念ながらもうこの世にはいない。ココにいるおるうは別人だ。」

こんなに凄味を効かせた颯太は初めてだった。

あまりの迫力におるうも楓も硬直してしまっていた。

「おるう、コイツのキズの手当を頼む。オレは竜之介の様子を見に行く。」

『颯太？』

颯太はあっという間に去っていった。

立ち尽くすおるう。

ゆっくり、痛々しい体の楓が立ち上がる。

「我はこのまま旦那様に報告に行かねばならん。颯太の手当をして

やれ。」

強がる楓。

立ち去ろうとした楓をおるうが静止した。

「顔くらい洗って行きなよ。その先に川があるから。真っ昼間にそんなボロボロじゃ返って目立つわ。」

おるうは自分の頭巾を渡した。

何ヵ所か破れているトコロの綻びも裾を破いて包帯代わりにしてやった。

『颯太は大丈夫よ、きっと。』

楓は優しい笑顔のおるうを前に、強がるしか無かった。

『旦那様に報告し終わったらウチにおいでよ。そんなボロボロじゃどこも歩けないでしょ。』

心の中ではこっそり楓に付いて行く気満々のおるうだった。

その頃、藩邸から出てきた竜之介は途方に暮れていた。

颯太は着物に着替えた後、竜之介の家を訪ねたが居らず、幸いにも

お隣の奥方に家紋入りの駕籠のコトを聞きつけ、一目散に水戸藩邸に向かった。

向かう途中、運良く竜之介に遭遇した。

が、あまりの悲愴っぷりに颯太はコトバを失った。

2人で無言のまま茶屋に入った。

「まいどぉ！今日はヤロー2人？珍しいね。」

沈みきっている竜之介の代わりに颯太がいつも通りに明るく振る舞った。

「茶2つ！大盛りで！！」

正直、颯太は顔を戻したくなかった。

戻した先には暗雲が見えそうな竜之介がいるからだ。

恐る恐るひきつりながらも顔を正面に向けた。

「どうしたんだよ！」

溜め息混じりに颯太が切り出した。

竜之介は大きく溜め息を付いて顔をあげた。

「颯太！！どうしたんだよその傷！？」

驚いて声が震えた。

「刺客は片付けてきたよ。あと一踏ん張りだ！。今夜決行だってのに何て顔してんだよ！！」

「お待ち！」

お茶が運ばれてきた。

竜之介は即座に手に取り口にした。

【今度こそ知られたか？】

内心穏やかでない。

硬直したまま、膝の上の手は固く握り拳をしていた。

「今回の件、水戸も関わっていたんだ。」

一点を見つめて話し出す。

「えっ？？？」

白々しく…。

「おるうが寺を出てったのをおったら塀の端におるうの着物があったから届けようとおるうの家に行ったら水戸の家紋が入った矢文を見つけちまって、藩邸に向かおうと思ったら家に父上が来てたんだ。」

「父上？？？」

コレは素直な驚きだ。

「で、駕籠が目立って仕方無いからって藩邸に連れてかれた。そこで言われたんだ。徳川本家の姫様との婚儀を考えているって。それで相手がおるうだってわかっちゃって。」

「父上が…、言ったのか？おるうだって。」

竜之介の表情はかなり険しかった。

「名前は出さなかった。ただ、今捜しているって。」

竜之介は失意の底にいるような表情になっていた。

血の気が無かった。

颯太もどうしていいか分からなかった。

「とにかく、今夜は決行の日だ！とりあえず任務のコト考えろ。」

そう言うしか無かった。

おるうはこっそり楓に着いてきていた。

楓が報告しているのを屋敷の隅で聞いていた。

楓の身が案じてならなかったからだ。

任務を果たせなかった部下を黙って帰すだろうか――
それが気になって仕方無かった。
楓は何事もなく報告を済ませ屋敷を後にした。
ただおるうは見逃さなかった。
楓が去った後の今林と早坂の不穏な表情を。
楓に気付かれないよう、また、追手に気付かれないように後を追った。
少しして、言い知れない殺気を感じたおるう。
おるうの背後からだった。
凄まじいスピードで近付いてきた。
おるうは短剣を追手に向かって剣を投げつけた。
短剣は追手の足に命中！
動きを封じた。
“トドメを刺さない”のが華蝶楓月の鉄則だ。
気付いた楓が駆け寄る。
『後は任せるわ。』

とりあえず縄で追手を縛っていたおるう。

「アタシもそんな悪趣味じゃないから。」

フッと苦笑いして一思いに短剣を抜いた。

抜いた短剣の血を追手の服で拭い取り、おるうに返した。

薄笑いを浮かべて。

『十分悪趣味でしょ。』

対するおるうも薄笑いを浮かべ、追手の服を引きちぎり、傷口をキツく結んだ。

体を縛ったヒモの隙間にそっと木札を挟んで、2人で周りに気付かれないよう、怪我人を搬送中に見せ掛けて追手を今林の屋敷の近くに連れていった。

『ヨシ、完了！』

去り際に屋敷の門にも離れたトコロから石矢付の木札を投げ入れ、屋敷を後にした。

おるうの家で傷の手当や着替えをしていると、颯太がやって来た。

「楓！？」

おるうの着物に着替え、髪も結い直して見違えった楓の姿に颯太は唖然とする。

「じろじろ見るな！」

照れ隠しに強がる楓。

楓は颯太の伊賀の仲間で、颯太の幼馴染みだった。
女子ながらに颯太に退けを取らない程の実力の持ち主だった。

「竜之介、知っちまった。今夜、マズイかも…。」

颯太の表情が暗かった。
「今、寺で瞑想してる。」

かなり不穏そうな表情だ。

おるうも眉間にシワを寄せる。

「何かは分からぬが、２人には借りがある。我がやるか？」

思いがけない楓の申し出に、２人は顔を見合わせた。

同時に大きく息を吸って、同時に叫んだ。

「あぁぁぁ！！！」
『あぁぁぁ！！！』

２人の息の良さに、楓の吹き出し笑いにつられ、おるうと颯太も笑

いが出た。
『そうね、アタシが出来ないのも楓のせいだしね。』
含み笑いのおるう。
かくして“花魁竜之介”ではなく、“花魁楓”の手によって、今夜の任務が決行されるコトになった。
…のだが、そのコトを知らない竜之介は、寺で依然、座禅を組んでいた。。。

純情

その夜、颯太・楓・竜之介・おるうは夏伊の部屋にいた。

通常、吉原は女人禁制なのだが、手形があれば入るコトが出来る。

手形に加え、吉原にも顔が利くおるうのコト、入るのは容易いコトだった。

『無理言ってゴメンね、夏伊。』

「アタシよりもオヤジ様の方が乗り気だったわ。アンタの花魁姿も見てみたかったって悔しがってたわ。」

雰囲気良く、仲良く話す2人を見ていた颯太と竜之介が呟きあう。

「おるうの前だと普通の詞で話すんだな。」

「あぁ。さすが幼馴染みだな。」

目はしっかりおるう達から離さなかった。

2人の前には支度中の楓がいた。

「楓も良く引き受けたよなぁ。オレやっても良かったのに。」

しみじみ言う竜之介。

表情はほんのり嬉しそうだが…。

「まんざらでも無いんじゃねぇの？嬉しそうだぞ。」

颯太の言う通り、支度中の楓の表情はどこか嬉々としていた。

「このまま居座っちまうんじゃねぇの？」

颯太は失笑気味にボソッと吐き捨てた。

夏伊のフリをして花魁の出で立ちの楓（ホントはおるうがやるハズだったが。）　が近藤を呼び出し、引き合い部屋で程よく酔わせたトコロで楓が退室し、屋根裏に待機していた颯太が隙間から巧みな縄使いで近藤の体を縛り、すかさず男子２人が近藤を運び出すと言う作戦は、寸分の乱れもなく、無事に遂行できた。

『楓、ありがとう。』

「我も楽しかった。こちらこそ礼を言う。」

明け方、店を出た４人。

おるうと楓の表情は充実した笑顔だった。

「あ～ぁ。おるうの花魁姿も見たかったな。」

颯太は両手を挙げ背伸びをしながら空を仰いだ。

『アタシもやりたかったから、そのうちね。』

1人竜之介は物凄く顔を強ばらせて首をひたすら横に降っていた。

「竜之介はおるうに惚れているのか？」

楓が隣の颯太の耳元で囁いた。

颯太は小さく頷いた。

楓はただフッと失笑して答えた。

かくして大奥での“おるう騒動”は無事終結を迎えた。

今回の任務の成功は幕閣に甚大な影響を与えた。

華蝶楓月の存在を強固なモノにさせた。

巷には“華蝶楓月英雄伝説”まで出る始末で。

感じる者には“脅威”にすら感じる存在にまでなっていた。

「凄いな華蝶楓月って。」

ある日の昼下り、久し振りに颯太・竜之介・おるうの3人は天太を誘って茶屋にいた。

全員がお茶を口にした瞬間、ポツリと天太が呟いた。
お決まりのように3人同時にお茶を吹き出す。
「どした？」
ポカンとする天太。
「いゃ、何でもない。何か引っ掛かったみたいだ。」
白々しくごまかす颯太。
「3人同時に？さすが兄弟だな。」
幸い天太には通用しているようだ。
【アンタの目の前にまさに全員いますけど。】
うつ向き、黙ったまま心の中でおるうが言う。
おそらく他の2人も、全く同じコトを思っているだろう…。
「おっお嬢！ここだったかぃ。」
4人で話をしているトコロに恰幅のイイ、カラカラとした男性が現れた。
見るからにどこかの番頭だった。
『あら元さん！どうしたの？』

今さらながらにおるうの顔の広さに感服する颯太と竜之介と天太だった。

「お嬢に紹介したい人がいるんだよ。」

竜之介が即座に反応した。

颯太も若干だが反応していた。

『また見合いの話？』

「また？」

竜之介と颯太が声を揃えた。

『元さんだけじゃないのよ。いろんな人に言われんのよ。』

嫌気たっぷりのおるう。

「お嬢にピッタリなんだよ！オレの見立に狂いはねぇ！！逢うだけあってくれ。」

懇願する元さんにおるうは毅然とした態度で言い返した。

『アタシは自分の嫁入りよりも寺の子供達の方が大事なの。今はまだ嫁に行く気はてんでないよ。その気になったら言うからとびきりの殿方を探してきておくれよ。』

あまりにも毅然とし過ぎていて元さんは何も言い返せず苦い顔で帰

って行った。

「逢うだけ逢えば良いじゃねぇかよ。」

天太が言った。

お茶を吹き出す竜之介と颯太。

2人でやっても同時に。

唖然とする天太。

「そう言えばアニキ達はどうなの？」

「は？」

「あん？」

ぽかんとする竜之介と険しい顔で聞き返す颯太。

「好きなコとかいないのか？」

2人とも固まる。

「いな…、い。」

ひきつり気味の竜之介。

「いねぇよ。」

颯太はふて腐れ気味に。

「ふぅ～ん。」

【この場でおるうなんて言えないよ。】

竜之介の心中は穏やかでは無かった。

「それにしてもちょっと有名になりすぎじゃねぇか？」

颯太が空を見上げてポツリと呟いた。

天太と別れ、3人は河原でたむろっていた。

『確かにね。あまり目立ちすぎるのも逆効果だったりするから少し大人しくしてよっか。』

おるうのコトバに颯太と竜之介も頷く。

確かに最近、“上様からの指令で動く”と言う本来の目的を越え、自分達から率先して動くようになっていた。

結果的にはそれが任務に繋がるので今まで良かれと思ってやっていたが。

「多分このまま当分はこの3人でやってくんだろ？だったらあまり派手に動かない方がいいな。」

空を見上げたままの颯太。

「でもさぁ…、」

浮かない顔の颯太。

「ずっとこのままだったらさぁ、結婚てどうなるんだろう。」

竜之介の突拍子も無い発言におるうも颯太もとっさに竜之介の顔を見た。

竜之介の表情は心無しか憂いを帯びていた。

「竜之介、結婚したいの？相手いないんでしょ？」

何も知らないおるうが言った。

“知らぬが仏”とは良く言ったモノである。

コトバに詰まる竜之介を見かねた颯太が答える。

「今いなくたっていずれはだろ。確かにこのまま続けるなら結婚は厳しいよなぁ。」

おもむろに大きく背伸びする颯太。

自分達の素性は一切知られてはいけないのが鉄則。

夜に行動するコトもある華蝶楓月には第3者との共同生活は厳しいモノがある。

颯太は、口には出さなくとも、竜之介の心の内がわかるだけに、複雑な想いだった。

自分達からの諜報活動の鎮静化と結婚についての不安は、竜之介の口から上様と篠矢に伝えられた。

「あいわかった。それは全く我々は構わん。竜之介達に負担を掛けてしまうのは本末転倒だからな。篠矢の伝達はこれまで通り続けると言うコトで良いな。」

上様は優しく微笑んで告げた。

キッとまっすぐ上様を見据えて竜之介は、大きくゆっくり頷いた。

「3人の行く末のコトは、正直、そんな問題が出てくるとはうかつだった。」

一転、上様は眉間にシワを寄せて腕組みした。

「あっ、いゃっ、その…」

自分で言ったコトとは言え、いざ上様の反応を見てうろたえる竜之介。

「独り身でいろとおっしゃるのであれば喜んでそう致します。」

「そのようなワケには参りません。皆様にはやはりご家族をお持ち頂くのが本望で御座います。」

篠矢が割って入ってきた。

とは言え、先日の一件で竜之介には誰か想う者がいるコトを察していた上様と篠矢。

「誰か想う者がおるのであれば、無理に動くコトはするでない。諜報活動に徹するでも全く構わん。」

上様の思わぬ気遣いに、竜之介は頬を赤らめてうつ向いてしまった。

さすがに、その“想う者”がおるうであるコトなど、口が割けても言えない。

竜之介は激しく動揺していた。

その頃颯太とおるうは———

「おるうさぁ…、」

いつものように茶屋の外の縁台で一服していた。

『何？』

何気無く聞き返すおるう。

もじもじしながら颯太は意を決して聞いた。

「惚れてる殿方とかいんのか？」

うつ向いたままの颯太。

『何よいきなり。驚くなぁ。』

カラカラと笑い飛ばすおるう。

「あっ、いや、昨日見合いの話があったり竜之介があんなコト言い出すからさぁ…。」

ますますもじもじしてしまう。

『居ないわよ。昨日元さんに言ったコトに偽りなんか無いモノ。』

ごく自然なおるうの笑顔に、なぜか竜之介は動揺してしまった。

「颯太は？。楓とかおみつちゃん（茶屋の看板娘）とか、いいんじゃない？」

何の気なしのおるうの発言でも、颯太には冷や汗が出る程の発言だった。

【オレ、何こんなに焦ってんだ？何でこんなに動揺してんだ？おかしいぞ？】

自分の心境にもまた、異変を感じ動揺してしまう颯太を尻目に、いつもと変わらない、あっけらかんとするおるうだった。

その日の夜、城から帰ってきた竜之介から新たな指令を受けた3人は、早速動き始めた。

竜之介・颯太、それぞれ胸に秘めた想いを抱えながら。。。

華のように

任務は順調に進み、間もなく終わろうとしていたある日ーーー

別れの時は、あまりにも突然に、あまりにも静かに、刻一刻と近付いていた。

ある日おるうは花を持って、墓参りに訪れていた。

命日に欠かさず訪れる少年の墓に。

時同じくして、竜之介に異変が起きているとは夢にも思わずにいた。

颯太は1人、家にいた。

忍上がりの颯太は、華蝶楓月の武器担当でもあった。

今まさに颯太は武器作りに励んでいた。

と、その時、家の前を行列が通過した。

【なんだ?】

この辺では珍しい光景だったが、颯太は気にも止めなかった。

まさかそれが華蝶楓月にとっての大事件の始まりだとは思うハズも無く。。。

行列は竜之介の家で止まった。

「お迎えに上がりました。直にお召し替え下さい。」

水戸の家臣に言われるがまま、突然の事態に戸惑いながらも竜之介は支度して駕籠に乗った。

間も無くして、再び颯太の家の前を行列が通過した。

【ぁんだよ騒々しいなぁ】

ぼやきながらも刃を研ぐ颯太に、近所の“さとおばちゃん”が緊迫した顔つきで颯太の元に駆け込んできた。

素早く道具をしまう。

「颯ちゃん！」

声まで緊迫しているおばちゃんに颯太は戸惑う。

「どうしたんだよおばちゃん！バケモンでもみたような顔しちゃって。」

「竜ちゃんが何だかまたえらいモンに乗っかってっちまったよ！」

【ぁん！？】

颯太の目がつり上がる。

「じゃ今の御駕籠は竜之介だってのか？」

立ち上がり驚く。

何度も頷くおばちゃんをヨソに、颯太は家を飛び出した。

「竜ちゃん何かしたのかぃ？一度ならず二度までも連れてかれるなんて…。」

おばちゃんの表情はさらに緊迫していた。

まさか竜之介が水戸の生まれの、将軍公の養子だなどと思うハズも無い。

「大丈夫だおばちゃん！じゃ！！」

そう叫んで家を飛び出した颯太は、駕籠の追跡では無く、おるうの元へひた走った。

それからでも追跡は遅くないと思ったからだ。

息を切らして着いた先におるうはおらず、その足で颯太は寺に走ったが寺にもいなかった。

【どこ言ってんだよ！】

とりあえず近場を走り回っていると、やっとおるうが現れた。

ずっと走り回っていた颯太は息が絶え絶えで、肩で息をしている状態だった。

『どうしたのよ颯太！』

おるうは何事かと、目を丸くしている。

「竜之介が！」

ただそれだけ発して、おるうの腕を掴んでまた走り出した。

“一刻も早く竜之介の元へ！”

その想い一心だけが颯太を動かしていた。

困惑するおるうも颯太に付いていくのが精一杯で、声を掛ける余裕が無かった。

水戸の藩邸まではかなりの距離がある。

颯太はまだしも、おるうは途中、かなり苦しかった。

「おるうはちょっと休んでろ。オレ見て来るわ！」

そう言って颯太は更に速度を上げて走っていった。

【何だってのよ！竜之介がどうかしたの？】

膝に手をついて息を調えるおるうだったが、どうしても気になって

フラフラながらも付いていった。

忍上がりの颯太の走る速度は尋常ではない速さで、あっという間に見失ってしまい、仕方無くおるうはアテが無いままとりあえず水戸藩邸に向かった。

その頃竜之介は水戸藩邸では無く、江戸城にいた。

通された大広間には、上様と篠矢、水戸の藩主（竜之介の実父）と家老の杉田と、なぜか養父の計６人がいた。

恐縮しきりの竜之介。

この６人が揃うのは初なだけに、張り詰めた空気が流れていた。

【何だろこの空気…。尋常じゃない程に居心地悪いぞ？】

上目遣いで上様の方と実父の方を何度も見やる。

「竜之介、水戸に戻ってくれぬか。」

「はっ？？」

竜之介はとても理解出来なかった。

上様の表情が渋かった。

水戸の実父が続けた。

「竜之介の兄上の克之介が病に伏しておる。恐らく家督は継げないだろう。」

突然の告白に、竜之介は完全に理解不能だった。

反応すら出来ないでいる。

「本来、家督は克之介様がお継ぎになるハズでしたが、このままで行きますと直系の若君がおられなくなる可能性が御座います。」

家老の杉田が続ける。

竜之介には、耳には入るモノの脳にまでは入っていかなかった。

「一度養子に出した以上、呼び戻すのは上様にも申し難かったが、御家の為にと、上様が進言して下さった。家督として、水戸に戻って来てくれぬか。」

“水戸に戻る”

と言うのは、かろうじて理解出来た。

だがまだ反応出来る状態では無かった。

1人水戸藩邸に向かった颯太。

「竜之介？竜之介は？？」

番人に尋ねても不審者扱いされるだけで、答えは無かった。

が、駕籠が無いコトには気付き、竜之介はおるうの元にまた一目散に走った。

【ってコトはお城？】

ココから江戸城までは大して遠くない。

だが行ったトコロで入れない。

途方に暮れる颯太。

やっとの思いで颯太に追い付いたおるうだったが、すっかり気落ちした颯太の様子に、状況を察せずにはいられなかった。

『家で待つ？』

優しくコトバを掛ける。

「喉カラカラだよ。」

とりあえず近くの茶屋に寄った。

「竜之介が駕籠に乗ってったらしい。」

おるうは大して驚かなかった。

「さとおばちゃんがウチに駆け込んできてさぁ。“竜ちゃんが連れてかれた”って。」

颯太は沈みきっている。

『今度は何かしらね。』

颯太には、おるうが素っ気なく見えた。

「おるう心配じゃねぇのか？」

憤りを隠せない颯太。

前例が前例なだけに、颯太は心配でならないのだが、どうやらおるうは違うようだ。

『心配じゃ無いワケないでしょ？』

おるうの迫力に、颯太は思わず怯んでしまった。

『駕籠に乗ってったってコトは御家の問題でしょ？いくら前例があるって言ったって、御家の問題じゃどうも出来ないよ。黙って待つしかないでしょ？』

おるうの最も過ぎる発言に、颯太はぐうの音も出なかった。

【相変わらず度胸座ってんなぁ。】

颯太はつくづく感心した。

戻って江戸城ーーー

「いくら実子とは言え、一度は家を出たワタクシがいきなり家督などと言っても、周りの方々は納得なさるんでしょうか。ましてやワタクシに家督など務まる自信が全くありません。」

上様や実父に散々説得され、ようやく理解した竜之介が口を開いたのは完全な不安だった。

実父はフッと笑みを浮かべた。

「案ずるな。そなたが養子に出ているのは周知の事実だ。家督として戻って来ることに何人たりとも異論は認めない。」

実父は毅然としていた。

上様を見ても篠矢を見ても養父を見ても、皆まっすぐ竜之介を見据えて頷いた。

うつ向く竜之介。

【上様はどうお考えの上で仰っているんだ？華蝶楓月はどうするんだよ！永く続くと思ってたのに…。上様が仰るのであれば従うしか

ない。でもおるうと颯太と別れるのか？そもそもオレに家督なんて…。】

竜之介の心の内は不安で一杯だった。

再びおるうと颯太。

「今夜、どうする？」

結局、竜之介の登城の時に迎えに待っているいつもの場所で2人で待つコトにした。

日はすっかり傾いていて、沈むまでもういくらも無かった。

今夜決行する予定でいたのだが…。

不安な颯太に、おるうは実にあっけらかんと答えた。

『やるしかないでしょ。』

【本当に女子かコイツは…。】

もはやここまで来ると、呆れるしか無かった。

日が暮れ始めた頃、憔悴しきった竜之介がふらつき気味に城から出てきた。

『お帰り。』
「お疲れぃ。」
竜之介は2人の顔が見れなかった。
いつも以上に、
今まで見たコトの無い程に、2人の笑顔が眩しく見えたからだ。
「竜之介…、」
言い掛けた颯太をおるうが腕を掴んで静止した。
『今日はゆっくり休んでな。終わったら行くから。』
ごく自然なおるうの笑顔に、竜之介は何も言い返せなかった。
「行くよ。」
“最後の任務だから”
竜之介の真意はそこまで言いたかった。
だが言えなかった。
「失敗したらどうすんだよ！大丈夫だって。任しとけ。」
颯太の顔には自信は見られなかったが、竜之介は気付いていないようだった。

竜之介は黙ったままでいるしか出来なかった。
もどかしい気持ちを抱えたままで。。。

3人は黙ったまま、竜之介の家の前で立ち止まった。
『じゃ竜之介、また後でね。』
颯太が口を開いたのとほぼ同時におるうが先にコトバを発した。
おるうは颯太が何を言おうとしたか分かっていた。
だからわざと遮る為に、おるうがわずか先に口を開いたのだ。
「あのさぁ…、」
竜之介がやっと口を開いた。
が、またしてもおるうが遮った。
『後から聞くよ。じゃあねっ！』
笑顔のおるうはためらう颯太を引っ張って竜之介の家を後にした。
何とも言えない顔で立ち尽くす竜之介だった。
「何で聞かねぇんだよ！アイツ言い掛けてたじゃねえかよ！」

困惑する颯太。

『今聞いたらウチらまで動揺しちゃうでしょ？ウチらまで失敗したらどうすんのよ！そもそも時間無いわよ？。』

おるうは前を向いたままで言った。

「そうかも知んねぇけどさぁ…。」

ふてくされる颯太。

おるうは素っ気無いワケでも、興味が無いワケでも無かった。

大方の予想が付いていたのだ。

つまり、おるうはおるうで動揺していて、真実を知りたくないのが本音なのだ。

もちろんそのコトに颯太も竜之介も気付くハズなど無かった。

言いたくても言い出せない、でも不安で押し潰されそうだから2人に助けて欲しい竜之介・・・

とにかく気になって気になって仕方無い颯太・・・

薄々は気付いていながらも真実を知るのを避けるおるう・・・

それぞれがそれぞれに想いを抱えたまま、最後の夜を迎えた。。。

楓のように

任務もほぼ終盤

おるうと颯太は、別々の方向からある屋敷に向かっていた。

颯太が見張り役、おるうが実行役となり標的となる最後の1人、とある奉行のすぐ側に木札を投げ入れるだけ———

のハズだった。

屋敷の屋根で待機している颯太。

屋根に体を突っ伏して集中させている。

今日はあいにくの雨。

颯太の体を雨が容赦無く襲う。

屋敷にどうにか忍び込んだおるうは全神経を集中させて奉行の部屋に向かう。

“いつものように”

深呼吸しながら精神集中させるおるうだったが、自分では気付いていた。

わずかな気の迷いに———

その頃、1人家で2人の帰りを待つ竜之介は、いても立ってもいられず、家の中を何度も何度も行ったり来たりを繰り返していた。

【やっぱりオレには家督は継げない。だからやっぱりこの任務は遂行したい！】

意を決して竜之介は支度して家を出た。

おるうと颯太の元へ向かって…。

颯太は胸騒ぎがしてならなかった。

颯太の集中力を持ってしても気配をは感じるコトが出来なかった為、念には念を押して少し移動してみた。

それまでは、あくまでも見張りなので全体を見渡せる位置にいたが、胸騒ぎがしてならない颯太は念のためおるうのすぐ近くまで移動した。

【もう動きがあってもおかしくないんだけどなぁ。】

ますます胸騒ぎが強くなる颯太。

おるうは自分の気持ちを沈める為、慎重に動いていた。
本来、任務は迅速さが最大の鍵。
遅くなればなる程、失敗の原因に繋がるからだ。
颯太は上で気を揉み始めていた。
【何やってんだ？アイツ…。大丈夫かよ。。。】
なかなか動かないおるうを案じ、颯太が代わりに動いた。
あっという間に任務を終え、おるうを捜す颯太。
おるうがいたのは井戸の影だった。
井戸にもたれ掛かってぐったりしているおるう。
近くには倒れている数人の男の姿が。
良く見るとおるうも傷だらけで悶えていた。
叫びたい気持ちを抑え、颯太はおるうを抱き起こす。
颯太は愕然とした。
【オレが見張っていたにも関わらずこんなコトになるなんて…。】
颯太は悔やんでも悔やみきれなかった。

雨で対峙し合う音が消されていたのだろう。

だが颯太は悲痛な面持ちの中、屋敷をやっとの思いで出た。

近くで様子を伺っていた竜之介が2人の元へスッ飛んで来た。

颯太に目で“静かに”と合図された竜之介は、黙って肩を貸して2人でおるうを運んだ。

おるうのあまりにも見るに耐えない姿は、2人を奈落の底に突き落とした。

【オレは何の為にいたんだよ・・・。】

おるうの姿に、大量の涙を流す颯太。

【オレがいなかったからだ…。】

声を殺して無く竜之介。

「おるうはオレが連れてく。竜之介は篠矢様に報告して来てくれ。おるうの家にいる。」

颯太の力無い声に胸を詰まらせながらも、竜之介は颯太の言う通り篠矢の屋敷に向かった。

とは言え、すっかり夜が更けたこの時間、さすがに屋敷は真っ暗だった。

竜之介は屋敷に忍び込み、篠矢の寝室を訪ねた。

もしもの非常事態に備え、篠矢から教わっていた緊急経路があった。

合図も決まっていた。

周りに気付かれないよう、床下から合図すると畳の下の板が外され、篠矢の声がした。

「申し訳ありません、おるうが負傷致しました。」

竜之介の報告に、篠矢は冷静に対処した。

「竜之介様はご自分達のお着替えをご用意なさって下さい。私はおるう様の元へ向かいます。」

篠矢に言われ、竜之介は颯太の家から着替えと薬草等の入った袋を持ち出し、すぐさま自分の家に行き着替えと食材や何か使えそうなモノを背負っておるうの家に向かった。

竜之介は無我夢中だった。

自責の念と闘いながら走り続けた。

それはまた、颯太も同じだった。

おるうに寄り添い、ずっと見守る中で苦悶の表情を浮かべていた。

だが長い時間雨に打たれていた颯太の体力はひどく消耗していて、ついつい颯太はうとうとしてしまっていた。

「颯太様！」

険しい顔の篠矢が現れた。

「申し訳ありません。オレのせいです。」

額が床に擦り付く程に土下座する颯太。

颯太の足元におるうの手が触れた。

素早く振り返ると、うっすら目を開けて颯太を見つめるおるうがいた。

「おるう！」

「おるう様！」

2人がすかさずおるうに近付く。

おるうの力無い笑顔が、颯太には辛くてたまらなかった。

起き上がろうと床に手を付くとすかさず篠矢と颯太が手を掛ける。

傷だらけのカラダには起き上がる動作も痛く、顔をしかめながらゆっくり起き上がった。

『颯太のせいじゃないよ。アタシが悪いの。』

おるうは弱々しい声でゆっくり話し始めた。

「まだ回復しておりませんから、無理なさらないで下さい。」

篠矢の表情は険しいまま。

「コレ、飲めるか？」

修行で培った知識で以前から煎じていた薬草で煎れた薬湯を差し出した。

「体力回復にいいから。」

颯太がおるうの口元まで湯呑を近付けるとおるうはそっと飲み始めた。

あまりの苦さに顔を歪めるおるう。

慌てて颯太は湯呑みを離したが、

『大丈夫。』

と弱々しい笑顔でまた飲んだ。

竜之介もびしょ濡れで現れた。

「竜之介様も颯太様もお着替え下さい。お風邪を召してしまいます。」

『アタシも、着替える。』

おるうはさらに立ち上がろうとする。

「まだ無理です。」

強い口調で篠矢が止める。

篠矢は自分と竜之介がそれぞれに持ってきた薬で処置を始めた。

竜之介と颯太が着替えている間に、おるうは篠矢に塗り薬等の丁寧な手当を受けて、何とか1人で着替えていた。

「お腹空いておられませんか？」

落ち着いたトコロで篠矢が切り出した。

もう空はうっすら明るくなり始めていた。

「食材、あります。」

竜之介が立ち上がる。

「お三方でお話しなさってて下さい。」

篠矢はそっと微笑んだ。

『ごめんね。』

さっそく口を開いたのはおるうだった。

慎重に、細心の注意で行動していたつもりだったが、ふとぬかるみで足を滑らせてしまいその時に御家人に見つかってしまったのだと言う。

そうするしかなかったとは言え、人と刺し違えてしまったコトをおるうは深く思い悩んでいた。

今まで任務中、無傷無血ほぼ無戦で来た誇りがおるうには少なからずあった。

ましてや人を刺す等とは、竜之介も颯太もしていなかっただけに、おるうは堪え難い苦しみを抱えてしまっていた。

「オレがいながら・・・」

颯太が唇を強く噛み締める。

「オレが居なかったからだよ、オレのせいだ。オレがいれば2人で潜入出来たのに。」

竜之介も悔しさを顕にする。

『ヤメてよ2人とも！アタシが悪いんだってば。2人にそんな顔されたらアタシが合わす顔が無くなっちゃうよ。』

おるうが心無しか涙声になっていた。

しばらく沈黙が続いてしまった。

「お口に合いますでしょうか。」

沈黙を切り裂いたのは篠矢だった。
粥を持ってきてくれた。
冷えてる上に弱っている3人の体には体の髄まで染み渡る思いだった。
3人の心まで解されるようだった。
「オレさぁ…」
竜之介がボソッと喋り出した。
竜之介は手を止め、おるうはそのまま聞いた。
「水戸に戻ることになったんだ。」
颯太は絶句、おるうは構わず食べ続ける。
「やっぱりね。」
おるうの一言に、竜之介までもが絶句する。
「お前、気づいてたってのか？」
驚きのあまり、顔がひきつる颯太。
「何と無くね…。御家の問題かな程度はね。」

唖然とする2人をヨソに、おるうは粥を平らげた。

「正直怖いんだ。」

うつ向いたままの竜之介。

「上様には私から報告致します。竜之介様のコトに関しましても上様からもお話がありますので、今宵お城にお越し下さい。迎えを手配致しますので。」

そう言い残し、篠矢は然り気無く立ち去った。

「ありがとうございました。」

3人の声が揃った。

「行くのか？」

竜之介にやんわり問い詰める颯太。

口を一文字にして暫く考えた後、ゆっくり口を開いた。

「不安なんだ。家督として戻らなきゃいけなくて。」

「家督？？？」

声を裏返す颯太とは対照的におるうは洗濯を始めた。

「おるう！」

颯太の声が強くなる。

『上様からも聞くんだからさ。洗濯、アンタ達のも出してよ。』

おるうは竜之介の口から真実を聞きたくないだけだった。

弱気な竜之介も、困り果てている颯太も見たくないだけなのだ。

そうとは知らず、疲れてるだけだと思っている竜之介は立ち上がった。

「颯太、帰るか。」

「えっ？」

うろたえる颯太。

「じゃな、おるう。また後で。」

竜之介はさっさと立ち去った。

慌てて颯太は後を追った。

おるうは1人、涙を浮かべながら3人分の装束を傷だらけの体で洗っていた。

コレが最後になるコトを覚悟して———

ひまわり

「竜之介！」

颯太が竜之介に追い付くのはあっという間だった。

「おるうってさぁ、ひまわりみたいだよな。」

竜之介は空を見上げて呟いた。

「はぁ？ひまわり？？気高いランかトゲのあるバラだろ…。」

失笑する颯太に竜之介はムキになって反論した。

「トゲじゃ無いよ！。そりゃ何と無くランは分かるけど、おるうが落ち込んでる所見たコト無いだろ？。」

竜之介の顔が優しい表情になっている。

「ヒマワリねぇ…。オレにはランにしか見えねぇなぁ。“アタシはアタシよ”ってくらいのな。」

納得してない颯太はフッと笑みを浮かべた。

「オレさぁ、不安でどうしようも無いからさぁ…、颯太とおるうにも水戸に来て欲しいんだ。２人が居れば怖いモンないからさ。」

不意に立ち止まり、竜之介は颯太をジッと見据えて言った。

「あぁぁぁぁぁん？？？」

颯太は思わず目をつり上げた。

「そう言ってくれんのはありがてぇけど、アイツが聞いたら“男でしょ？甘ったれないで！！”くらいに言われちまうぞ！？」

颯太の発言に、今度は竜之介がフッと笑って言った。

「颯太もおるうのコト、好きなの？」

颯太は度肝を抜かれたような思いだった。

「冗談じゃねぇよあんな高飛車女！！それはオマエだろ？嫁にもらっちゃえよ！」

顔を赤くして否定する颯太に、竜之介は含み笑いをして答えた。

「そうなれば良いなって思ってたよ。でも、いざ家督を継げって言われて思ったんだ。おるうは御方様に収まるような女性じゃないから諦めようって。」

颯太は竜之介のあまりに晴れ晴れした顔に、痛感したのだった。

「竜之介、本当におるうのコト好いてんだな。」

竜之介はただ頷くだけだった。

「男だね、竜之介君！！いやぁ、御見逸れ致しましたよ！！男になったな。」

照れてうつ向く竜之介の肩に手を回して歩く颯太までが、爽やかな気持ちになっていた。

【ん？】

突然、颯太はとんでも無いことに気付いてしまった。

「てコトは、華蝶楓月は解散？」

思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。

「解散かどうかは分からないけど、オレは昨夜が最後だろうな。だから、居ても立っても居られなくて。」

颯太はもう1つ、竜之介の話の途中で別のあるコトに気付いてしまった。

愕然として立ち止まる颯太。

「どうしたの？」

様子を伺う竜之介。

ゆっくりと歩き出す颯太。

「おるうさぁ…、昨夜からヤケに素っ気ねぇなぁと思ってたけど、もしかして認めたく無かったんじゃねぇのか？」

強張る颯太。

「そうだよ！だって何と無く気付いてたって言ってただろ？じゃあもしかしてさっきの洗濯も？」

ふたりは思わず立ち止まり顔を見合わせた。

数秒そのまま顔を見合わせた後、息ピッタリにため息をつき、照れ笑いまで同時にし合ってしまった。

「あんな体で洗濯なんて、何てヤツだよ。やっぱヒマワリだな。」

颯太はうつ向いて呟いた。

日が暮れ始めた頃、３人の元にそれぞれに駕籠屋がやって来た。

「篠矢様からのご依頼で参りました。」

３人が３人、同じコトを思っていた。

【駕籠ぉぉぉ？？今までそんなコト無かったのに…。お迎えってコレ？？？】

困惑する３人を乗せた駕籠はそれぞれの家を発った。

着いた先は寺だった。

【何だよ、かなり焦らせやがって！！】

颯太は胸を撫で下ろした。

篠矢に“城に来い”と言われ駕籠に乗せられ、正直怯んでしまっていた。

恐らく3人全員だろう。

いつもなら、城に行く時は寺の茶室から隠し通路を使って行くのが通例だった。

にも関わらず、駕籠が迎えに来た時はかなり畏縮したが。

すっかり緊張が解れて茶室に向かう。

竜之介はおるうが心配で、駕籠を降りたまま立ち尽くしていた。

「大丈夫？」

おるうの姿が見えるなり、竜之介はおるうの元へ駆け付けて手を差し出した。

『ありがとう。』

ゆっくり小さな歩幅で歩くおるうを、竜之介は沈痛な面持ちで見守るしか出来なかった。

茶室に入ると、竜之介とおるうは同時に声を上げた。

「上様？」

『上様！！』

室内には茶を点てている篠矢だけでなく、驚くべきコトに上様も着物姿で座っていた。

「傷は大丈夫か？」

おるうは大きく頷く。

続けて上様は照れ気味に言った。

「せっかくだからワシも通路を通ってみたくてな。おるうにあまり無理はさせたくなかったしな。」

何処と無く無邪気な上様の笑顔に2人は何も言えなかった。

間も無く颯太も現れた。

「此度の任務は大変難儀であったな。」

上様の言葉に3人は身が引き締まる思いだった。

下げたアタマをなかなか上げれないでいた。

「アタマを上げよ。特におるうには、詫びの言葉もない。」

そんなコトを言われ、余計にアタマを上げれなくなる3人。

「竜之介から話は聞いたとは思うが、此度、竜之介は家督を継ぐ為、水戸に戻るコトになった。」

竜之介の顔が少しだけ上がる。

颯太は無意識に勢いよく顔を上げてしまった。

おるうは依然アタマを下げたまま、上げれずにいる。

「本来であればまだまだ3人で活動して欲しかったが、家督を継ぐハズだった竜之介の実兄が病に伏していてな。」

3人はジッと黙って聞き続ける。

「よって、実に痛恨の極みだが、本日をもって華蝶楓月は解散とする。」

「えっ？」

3人の声が見事に揃った。

さすがのおるうも顔を上げてしまった。

「颯太には竜之介に付いて水戸に行って欲しいのだ。何かと大儀であろうから、是非とも竜之介を支えて欲しいのだ。頼む。」

「慎んでお受け致します。」

「お心遣い、深く感謝申し上げます。」

竜之介と颯太が再びアタマを伏せる中、おるうは呆然状態。

「おるうには、傷が癒えたら旅に出てもらいたい。」

面喰らったような顔でおるうはすかさず尋ねた。

『旅？…で、ございますか？』

声が弱々しい。

さすがのおるうもうろたえる。

【おるうは一緒じゃねぇのか…。】

心無しか残念そうな颯太。

隣の竜之介は内心ホッとしている。

「色々、他の世界を見て来て貰いたい。何年掛かっても構わん。最終的には外の国にも目を向けて欲しい。身の回りのコトは案ずるな。何人か付ける。」

【外の国ぃぃぃ？？？】

3人全員、顔が硬直。

・・・と思いきや、おるうは嬉々とした顔で目を輝かせている。

「怖くはないか？」

神妙な表情の上様。

竜之介と颯太も不安げな面持ちで見つめる。

おるうは周囲の不安を吹き飛ばす程の爽やかな顔で凛として答えた。

「とんでもありません。新しい世界を知るのに恐怖を感じてどうしろと仰るのですか。むしろ期待に満ち溢れております。私にその命を頂けましたコトを大変光栄に存じ上げます。」

周りの男子４人は一瞬唖然としたが、すぐにフッと笑みを浮かべた。

【さすがだな…。】

４人全員そう感じずにはいられなかった。

と同時に、おるうのコトバが竜之介の胸に熱く響いてもいた。

“新しい世界を知るのに恐怖を感じてどうしろと…。むしろ期待に満ち溢れている。”

家督を継ぐコトに不安で、肝が押し潰されそうな程だった竜之介の胸に響いて目頭が熱くなった。

「今まで大変大儀であった。あっという間ではあったが、そなた達の活躍は江戸の町に大きな影響を与えた。尽きない程の礼を申す。最後の任務、しかと頼んだぞ。」

竜之介・颯太・おるうの目には、うっすら涙が滲んでいた。

翌日、朝から竜之介と颯太はそれぞれに家の片付けに追われていた。
片手に包みを持ったおるうが颯太の家に現れたのは、昼前だった。
『お疲れ様！』
歩く姿がなんとも痛々しく、ぎこちなかった。
「おるう！？」
作業の手を止めて慌てておるうに駆け寄る颯太。
「大丈夫か？休んでろよ！無理すんなよ。」
『このくらい何とも無いわよ。本当なら掃除くらい手伝いたい所なんだから。』
明るく笑い飛ばすおるうは、お重と洗濯した装束を置くと、すぐに立ち去った。
「もう行くのか？」
『竜之介の所にも置いてくるわ。洗濯するものあるならやるけど？』

あまりのさっぱりっぷりに今更ながら唖然としてしまう颯太だった。

3人の家はすぐ近くにある為、傷の体でなければいくらも掛からない距離だ。

『お疲れ様！』

颯太よりは物が少なかった竜之介は、一通り終えて華蝶楓月の道具を見てぼんやりしていた。

おるうの声に、竜之介は顔を上げた。

「おるう、大丈夫??」

竜之介も慌てて駆け寄る。

2度目ともなるとさすがに苦笑いになるおるう。

『何なのよ2人とも。はい、お弁当。本当は掃除くらいなんだから。』

明るく屈託のない笑顔のおるうに、竜之介の胸は締め付けられそうだった。

「おるう、お願いがあるんだけど…。」

竜之介が恥ずかしそうに言い出した。

『何？』

さりげなく答えるおるうに、竜之介は顔を上げておるうの目を見据えて言った。

2人が向かった先は茶室だった。

「オレのお茶、飲んでくれないか。」

竜之介の精一杯の“告白”だった。

竜之介と颯太はたびたびおるうにお茶を習っていた。

「おるうに習っといて良かったよ。」

緊張する竜之介におるうは終始笑顔で、ぎこちない竜之介を見守っていた。

「オレさぁ、肝が潰れるくらい不安でたまらなかったけど、おるうの昨夜のコトバで凄く勇気が出たんだ。ありがとう。」

『お礼なんか言われる筋合いじゃないわ。アタシ達は“心友”なんだもん。アタシだって竜之介や颯太に助けられるコト、たくさんあるわよ。お互い様よ。』

竜之介はドキッとした。

“心友”

目からウロコだった。

「おるうがオレに？」

信じがたい竜之介は、目がテンになっている。

飛びきりの笑顔で頷くおるう。

『いつも2人の顔が浮かぶわ。任務の時だけじゃなく、普段も。』

竜之介はたまらなく嬉しかった。

狂喜乱舞したいくらい嬉しかった。

“颯太と一緒”ってコトは全く問題では無かった。

『正直、不安が微塵も無いとは言わないわ。外の国なんて言ったらコトバが通じないもの。でも、任務だし、何より竜之介の方がもっと大変だろうから。』

おるうの笑顔が、おるうの言葉に嘘が無い何よりの証拠だった。

【ありがとうおるう…。ずっと、好きだよ。やっぱりおるうはひまわりだよ。】

竜之介は心の中で呟いた。

数日後、おるうに見送られながら竜之介と颯太は水戸に旅立った。

『じゃ、竜之介を宜しくね、颯太。』

竜之介はさっさと駕籠に乗っている。

「おう！任しとけぃ！！」

颯太の表情は自信たっぷりだった。

「颯太、行くよ！」

離れた所から竜之介の声が聞こえる。

颯太は慌てて竜之介の元に駆け寄る。

「オマエ、いいのか？」

声が焦る颯太。

「いいんだ、心友だから。行くよ。」

竜之介は今まで見たコトの無い程の清々しい表情をしていた。

行列は静かに出発した。

おるうと2人の首には、おるうが華蝶楓月の木札で作って御守りが下げられていた。

3人の顔は実に晴れ晴れとしていた。

涙は誰の目にも無かった。

“心友”

木札には、この文字と3人の名前が刻まれていた――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6789k/

華のように楓のように

2011年9月8日14時55分発行